●第八十八段

さる人、小野道風の書ける和漢朗詠集を所有せるを或人、「貴家累代の御品、御申傳へは根據もあるべきが、四條大納言の撰ばれしを、時代ちがひの道風が書きしと云ふこと心もなしと思ふ」と言ひしがさる人は「されば、世間に珍らしきものなり」とて、ます〳〵大切に保存せられたり。

○第八十八段　あるもの小野道風の書ける

あるもの、小野道風の書ける、和漢朗詠集とて、持ちたりけるを、ある人、『御相傳、うける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを道風かかんこと、時代やたがひ侍らん、覺束なくこそ』と、いひければ、『さ候へばこそ、世にありがたきものには侍りけれ』とて、いよ〳〵秘藏しけり。

註解　小野道風は、村上天皇の御宇の人、能書の一人、藤原佐理、藤原行成と共に三蹟と稱せらる。●和漢朗詠集は、和漢の人の有名なる詩歌を集めたるもの。四條大納言公任卿の手

●第八十九段

「深山に猫又と云ふ變化ありて、人をとる由」と或人のいひしに「山でなき此邊にも猫の年經て猫又になり、人を食ふ事もあるのに」と言ひしを行願寺の附近に住む連歌法師何阿彌陀佛と云ふが聞き、獨りにて行く身は用心すべき事と思ひ居りし時分、或所にて

に成れり。備考、和歌は、堀川院の時、師頼の追補に屬す。●時代云云は、道風の死せし康保以後に、公任卿は生れたゝ人なるが故なり。

○第八十九段　奥山に猫又

『奥山に、猫又といふものありて、人をくらふなる』と、人のいひけるに、『山ならねども、これらにも、猫のへあがりて、猫又になりて、人とることはあるものを』と、いふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、ひとりありかん身は、心すべき事にこそと、思ひける頃しも、ある所に

連歌に夜更し、只一人にて歸り小川へさしかかる折しも、噂の猫又かきつき首のつけ根を食はんとす。法師は贈つぶれ之を防ぐ力もぬけ、腰もなへて小川へ轉びおち、「助けてくれよ、猫又が出たぞ」と大聲あぐれば、附近の家々より松明ともしかけ來て見れば、此邊にて見知れる法師なり。「これは如何した事か」と小川の中より起しあぐれば懐中した連歌の懸賞品などは水中に失ひぬ。危かりて、夜更くるまで連歌して、ただ一人、歸りけるに、小川のはたにて、やがて搔きつくままに、頸のほどを食はんとす。肝心も失せて、防がんとするに力もなく、足もたたず、小川へころび入りて『たすけよや猫又、よや〳〵』と、叫べば、家々より、松ども共もして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。『こはいかに』とて、川の中より抱き起したれば、連歌のかけもの取りて、扇、小箱など、ふところに持ちたるも水に入りぬ。希有にして助りたるさまにて、はふ〳〵、家に入りにけり。飼ひける犬の、暗けれど、主を

し所を辛くて助かりしと云ふ風に、はうはうの體にて歸りたり。後にてきけば、飼犬の飛びつけるものなりしとぞ。

●第九十段

大納言法印の侍童鶴丸、やすら殿と交際し、平生往來せしが、或時其處へゆき歸りしを「どこへゆきしぞ」と問ひし知りて飛びつきたりけるとぞ。

註解　猫又は、猫の年老いて尾二またに分れ、能く化くと稱せらるるもの。●これらは、此邊。●何阿彌陀佛の何は、判然せぬより用ゐし字。相阿彌又は世阿彌の如く、昔は多く名として用ゐられき。●連歌は、解すでに前に出づ。●小川のはたは、小川のきは。ほとり。●かけものは、今の懸賞品。連歌の褒美として、主人より出す引出物の稱。●希有云云危かりし所を珍しう助かつたと云ふ風にて。

○第九十段　大納言法印の召使ひし乙鶴丸

大納言法印の召使ひし乙鶴丸、やすら殿といふもの知りて、常に行き通ひしに、ある時出でて、歸り來たるを、法印『いづくへ行きつるぞ』と、い

に「やすら殿の許に參りましてござります」と答へぬ。そのやすらと云ふは男か僧かと法印再び問ひしに「どうで御座りましたか、頭をば見ませなんだ」と恥かしげに袖を顔に當てて答へたり。何して頭のみ見えざりしわけあるべき。

ひしかば、『やすら殿のがりまかりて候ふ』と、いふ。『そのやすら殿とは、男か法師か』と、又問はれて、袖かきあはせて、『いかが候ふらん、頭をば見候はず』と、答へ申しき。などか、頭ばかりの見えざりけん。

註解 大納言法印は、大納言の入道したる名か、大納言の子の入道したる者か。法印は僧正に相當し、大僧正は大納言に準ぜられしより、大僧正と云ふ意か、考ふべし。●やすら殿は、其人不明。●行き通ひは、ゆきき。交際。●がり（許）、もと。所。●袖かき合はせは、兩袖を合はせて顔をかくすまの所作、多く恥かしがりてするもの。

○第九十一段　赤舌日といふこと

赤舌日の事は、陰陽道にては彼れ是れ論ぜず。故に古人は此日をきらはず。方今誰かが言ひ出して嫌ひそめたるか。此赤舌日に爲せし事も言ひし事も皆成就せずといふが、愚なる事なり。吉日を見て爲せし物事の成就せざる例を擧げば、亦同一なるべし。其理由は、世の中は無常にして變り易き境涯なり。故に有りと思ひし物も失せ、始ある事も終なく、志望は成らで希望はつきず。人の心は定まらず、萬

赤舌日にいふこと。陰陽道には、さたなき事なり昔の人、これを忌まず。この頃、何もののいひ出でて、いみはじめけるにか。この日あること。末通らずといひて、その日いひたりしこと、したりしことかなはず、得たりしものは失ひ、企てたりしこと成らずといふ、おろかなり。吉日を擇みてなしたるわざの、末通らぬを數へて見んも、又、ひとしかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも、存せず、始あることも、終なし。志は遂げず、望は絶えず、人の心不定なりもの皆、幻化なり。何ごとかしばらくも住する、

物は皆はかなきものなり。何一つとして暫時も一所にとどまるべき。日の吉凶を論ずるは此道理を知らぬなり。吉日と雖も凶事をすれば屹度凶、惡日と雖も善事をすれば屹度吉なりと云へり。吉凶は人によるものにて、日の如何には關せず。

●第九十二段

或人弓術を習ふに當り、二本の矢を手にして的に對せり。

この理を知らざるなり。吉日に凶をなすに、必ず凶なり。惡日に善を行ふに、必ず吉なりといへり吉凶は、人によりて、日によらず。

註解　赤舌日は、赤日又は赤口日とも云ふ。陰陽家にて、萬事に凶なりと云ふ日。●陰陽道は、卜筮方鑑又は天文、曆數等に關する學問。●さた(沙汰)云云は、何とも論じて無しとのこと。●この日あることは、赤舌日に有りし物事。●未通らずは、成就せず。●もの昔、變化は、萬物のはかなきことに住するは、落ちつきてゐやうか、決して定まつてはゐぬ。

○第九十二段　ある人弓射る事をならふにあ人、弓射ることをならふに、もろ矢を手挿みて、的に向ふ。師のいはく、『初心の人、二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢に、なほざりの心あり。毎度、ただ、得失なく、この一矢に定むべしと思へ』と、いふ。わづかに二つの矢、師のまへにて、一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みみづから知らずといへども、師、これを知る。このいましめ、萬事にわたるべし。

註解　もろ矢は、二本の矢。●初心の人は、ならひそめの人。●たのみては、當てにして。●毎度云云は、一の矢二の矢と區別を立てず、射る度に必ず射中つべしと思へとの義。●おろかは。おろそか。●萬事に云云は、此訓誡は何事にも心得

師は「初學の人二本の矢を持つは不可なり。後の一本に心ゆるみ、初矢は等閑になる。一の矢二の矢の區別を立てず只この一矢にて、射中つべく思へ」と言はれぬ。僅かに二本の矢、師の面前にて一本にても等閑にすべく思ふべき。氣をゆるむるの心、自身は知らぬも師は之を見ぬかる。此弓術上の訓誡、何事にも應用すべし。

學問する人、一日送りにしてのちに丁寧に研究せんとす。

況して、一瞬間に於て、怠惰の心起るを知るべき。人は何故思ひたつとすぐさま、勉強する事を難んずるぞ。

●第九十三段

べき事の義。

道を學する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には、夕あらんことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。いはんや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。何ぞ、只今の一念に於て、ただちに爲る事の、甚だ難き。

註解　道を學する人は、學問する人。●夕に云云は、一日送りにして學をおくらすを云ふ。●一刹那は、極めて短き時間。一彈指（ひとつまはじき）する間。●何ぞ云云は、人は何故思ふとすぐに勉強する事が出來ぬのだらふとの意。

○第九十三段　牛を賣るものあり

「牛を賣る人あり。買ふ人は明日價をやり、其牛を引取らんと云ひしに、一夜のまに牛死にぬ。買手に利ありて賣手は損せり」と語る人ありたり之を聞きし傍人は「賣手は實に損せるも又別に大利あり。生物の死に迫れるを知らぬこと、牛の事さへ今の話の如し人も同一なり。然るに意外にも牛は死して人は死せず。一日の壽命は萬圓に比して尊し牛の價は輕少なり。萬圓をまうかり一錢を失ひし人、決し

『牛を賣るものあり。買ふ人、明日、その價をやりて、牛を取らんといふ。夜の間に、牛死にぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり』と、語る人あり。

註解　夜の間には、その一夜の中に。

これを聞きて、かたへなるものいはく、『牛の主まことに損ありといへども、又、大なる利あり。その故は、生あるもの、死の近きことを知らざること、牛、既にしかなり。人、又、同じ。はからざるに、牛は死し、はからざるに、主は存せり。一日の命、萬金よりも重し。牛の價、鵞毛よりも輕

て損さは云ひがたし」と語りたるに、聞く人何れも嘲笑して「其道理は牛の持主に限りはせじ」と云ひたり。前の人又「人として死をきらはゞ生を大事にかくべし。生きて居るを喜び毎日樂み居るに非ずや。愚者は此樂を忘却し、煩勞にも生の外の樂を求め、壽命と云ふまき財を忘却して、危險を侵して金錢をほしがるは、滿足することなし。生存中に生を樂しまず、死にぎはに死を恐れなゞ、前の話の理由は通ぜざるべきも、人の皆生を樂しまざるは、死を恐れぬが爲なり。否、死を恐れざるに非ず。死の近き事を忘却するなり。萬一、生や死の事に關係せすと云ふならば、眞如實相の存在の理を得たる人と云ふべし」と云ひしに、人々はます〳〵嘲笑したり。

●第九十四段

太政大臣實氏朝廷へ出でられしに、勅書持ちし北面武士、大臣に出逢ひて下馬せり。大

し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず』と、いふに、みな人、あざけりて、『その理は、牛の主に限るべからず』と、いふ。

註解　萬金は、命のかけがへなきを云ふ。●鵝毛は、輕きこと卽ち、論ずるに足らぬ物事の形容。

又いはく、『人、死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂まざらんや。おろかなる人、この樂を忘れて、いたづがはしく、外の樂を求め、この財をわすれて、あやふく、他の財を貪るには、志滿つことなし。生ける間、生を樂まずして、死に臨みて、死を恐れば、この理あるべからず。人、皆、生を樂まざるは、死を恐れざるが故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るるなり。もし又、生死の相に與らずといはゞ、まことの理を得たりといふべし』と、いふに、人、愈々あざける。

註解　與らずといはゞは。生や死の事に關係せずと云ふなら。●まことの理は、不生不滅の眞理、眞如實相の存在の理。●愈々あざけるは、ます〳〵ひやかし笑ふた。

○第九十四段　常磐井の相國

常磐井の相國、出仕し給ひけるに、敕書を持ちたる北面、あひ奉りて、馬より下りたりけるを、相

臣のちに「北面武士の某は勅書持ち居りて下馬せり、これ位の故實を知らぬ者、どうして奉公が出來べき」と云ひしが、某は免職となりたり。勅書は馬上に捧げて御見せ申すべく、下馬するものならずと

●第九十五段
「文箱や手箱のくり形に紐の

國、後に、『北面なにがしは、勅書を持ちながら下馬し侍りしものなり、斯程のもの、いかでか、君につかうまつり候ふべき』と、申されければ、北面をはなたれにけり。勅書を、馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、下るべからずと。

註解　常磐井の相國は、太政大臣實氏のこと。●北面は、北面武士の略言、院の御所を守護する武士、白河院の時より始まる。●つかうまつりは、仕へ奉ること。奉仕。●はなたれは放逐さるること。

○第九十五段　箱のくりかたに

『箱のくりかたに、緒をつくること、いづかたにつけかた、どこにすべきぞ』と、ある有職の人にたづね申しと故實家に尋ねしに、左につけると右につけるとの二説ある故、何れにするも惡しからず。文箱は大抵右につけ、手箱は左につくるが普通なり」と申されぬ。

●第九十六段
めなもみ草は、嵎にさされたつけ侍るべきぞ』と、ある有職の人にたづね申し侍りしかば、『軸につけ、表紙につくること、兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は、多くは、右につく。手箱には、軸につくるも、常のことなり』と、仰せられき。

註解　箱のくりかたは、かたは形なり。箱の蓋を半月形にくりし處。●緒をつくる云云は、紐を結ぶは何處にするものぞと問ひしなり。●軸は左。表紙は右。巻物を展ぶる時の意に取る。

○第九十六段　めなもみといふ草あり

めなもみといふ草あり。くちばみにさされたる人

る人。この草をもみてつくれば、即座になほると云ふ、見おぼえておくがよし。

●第九十七段

其物について其物をへらし害するもの、數へ難き程多し。身に虱、家に鼠、國に盗賊、馬鹿に財貨、君子に仁義、僧侶かの草をもみて、つけぬれば、すなはち癒ゆとなん。見知りて置くべし。

註解　めなもみは、稀茶さ書す。別に粘糊菜、希仙等の名あり菊科に屬する草、莖は方形にして高さ二三尺、葉は圓形にして尖り、細毛を有して對生す。花は小形黄色、秋の頃枝頭に着生す。花下の苞は粘毛を有して人衣につく。きれん。●くちばみは、まむし(蝮)。はみ。

○第九十七段　そのものにつきて

そのものにつきて、その物を費してそこなふもの數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に盗人あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧には佛法あり。

註解　小人は、度量狹きつまらぬ者。ちゑなき者。君子に仁義は、君子は仁義のために身をそこなふことにて、伯夷叔齊が首陽山に餓死せるが如き、比干が胸を割かれたるの類。又、僧に法ありは、僧の身を害ふには佛法ありとにて、法を說ける智識上人が流されたるが如き、日蓮上人が斬られんとしたるが如き類。

●第九十八段

尊き高僧の言を書きし一言芳談とか名づけたる草紙を見しが、自分の意見通りにて且つ記憶して居る事記して見ば、一　爲やうか爲まいかと考へ

○第九十八段　尊き聖の言ひ置ける事

尊き聖の言ひ置ける事を書きつけて、一言芳談とかや、名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えしことども。

一　しやせまし、爲ずやあらましと思ふことは

しものは、大抵ならば爲ぬぞよろし。

一　佛道の後世を願ふものは糠味噌壺一個にても持つものならず。持經や本尊もよき物を所有する、益なき事也。

一　世棄て人は、無きも事缺かすと云ふ程度を考へて世を送る、此上もなき事と思ふ。

一　佛道に入らんと思はば、上位の者は下位に、智者は愚者に、富人は貧に、才能おほやうに、爲ぬはよきなり。

一　後世を思はんものは、糂粭瓶一つも持つまじき事なり。持經、本尊に至るまで、よきものを持つ、よしなきことなり。

一　遁世者は、なきにことかけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一　上藺は下藺になり、智者は愚者になり、德人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一　佛道を願ふといふは、別のことなし。暇ある身になりて、世のこと、心にかけぬを、第一の道とす。

この外も、ありし事ども、覺えず。

註解　尊き聖は、尊敬すべき學德高き僧。●一言芳談は、書物の名、上下二冊。作者不明なり。●草紙は、物語などの册子●心にあひては、自分の心に一致して。如何にもと思うて。●おほやうに、大抵ならば。●糂粭瓶は、ぬかみそいれ。●持經は、常に身をはなさずによむ經文。●本尊は、ほんぞん寺院にて主とする佛像。又、自身の朝夕に拜する佛像。●よしなきことは、つまらぬ事。●上藺は、上位、下藺は、下位といふ程の義。●德人は、ぶげんしや。富者。

○第九十九段　堀川相國は

堀川相國は、美男のたのしき人にて、その事とならある人は無能にならざるべからず。

一　佛道を願ふことは別に六かしきにも非ず。間暇ある身の上となり俗事を心にとどめざるが第一なり。以上の外にも、數多ありたれども記憶せず。

●第九十九段

久我太政大臣は、美男なる上

富者にて、何事にも驕奢にせられたり。子息基俊卿を檢非遣使の別當として其事務を執らせられしが「役所の唐櫃見すぼらしと云ひ、美しく改造するやうに」と命ぜられたるも「此唐櫃は太古より相傳して其始めわからず、幾百年もすぎたり。幾代をも重れし朝廷の器物は、古びて破しを法式とす、無雜作にかへ難き旨故實に精しき諸役人が申し立てしに、この改造の事、さたやみになりたり。

●百段

太政大臣雅實公、殿上にて水をお飲みになりしとき、主殿司は土器を差上げしに、檜杓を持ち來よとて、その檜杓にて飲み給ひたり。

●第百一段

或人、大臣に任ぜられし披露

く、過差を好み給ひけり。御子基俊卿を大理にして、廳務を行はれけるに、『廳屋の唐櫃、見ぐるしとて、めでたく造り改めらるべきよし』仰せられけるに、『この唐櫃は、上古より傳りて、その始を知らず、數百年を經たり。累代の公物、古弊を以て規模とす。たやすく改め難きよし』故實の諸官、申しければ、この事、やみにけり。

註解　堀川相國は、久我太政大臣源基具公。●美男云云は、美男子なる上、金錢に不自由なき樂な身。●過差は、おごり。驕奢。●大理は、檢非違使別當の唐名。●唐櫃は、支那風に作りたる脚ある櫃。●累代の公物は、幾世も傳へ來し朝廷の御器物。●古弊は、ふるびやぶれたること。●規模は、かた法式の義。●故實は、法令儀式などの古昔の事例。又、そなし知れる人。

○第百段　久我相國は

久我相國は、殿上にて、水をめしける時、主殿司土器を奉りければ、まがりを參らせよとて、まがりしてぞめしける。

註解　久我相國は、太政大臣雅實公。●土器は、かはらけ。●まがりは、まげもの。檜杓。

○第百一段　ある人

ある人、任大臣の節會の內辨を勤められけるに、

の時に、内辨の役を勤めたるが、内記の所持せる宣命文を受取るを忘れ、其儘紫宸殿へ上られたり。此上もなき失態なるも戻りて取りもならず困りて居られしを、康綱氣をきかし、衣被の女官を頼み、忘れ給ひし彼の宣命文をひそかに差上げさせたり、すぐれし取計らひなりき。

内記のもちたる宣命を取らずして、堂上せられにける。きはまりなき失禮なれども、立ちかへり取るべきにもあらず。思ひわづらはれけるに、六位の外記康綱、きぬかづきの女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

註解 任大臣の節會は、大臣仕官の披露にして、今の大臣親任式。●内辨は、節會に主として事を執りし職名。承明門内にて諸事を辨ぜしが故に此名あり。●内記は、うちのしるすつかさ。古昔、中務省の被管にして、詔敕をつくり、御書の記錄の事を司りしもの。今の、文事秘書官の如きもの。●宣命は、天子のおぼしめしを宣命文に記したるもの。●外記は

古昔、太政官に屬せし大外記、小外記の稱。詔敕及び上奏文を記草し、また其事に關する記錄を司りしもの。今の書記官の類。●きぬかづきの女房は、衣被して居る女官。

●第百二段 尹大納言忠光入道、鬼やらひの上卿をつとめられ洞院左大臣殿に順序を尋ねられしに、又五郎男を師として教へて貰ふ外なしと申されたり。又五郎は老衛士にて宮中の儀式事には精通したり。近衛殿著陣なされし折、小半疊の敷物をわすれ、外記を御呼びになる

○第百二段 尹大納言光忠入道

尹大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院左大臣殿に、次第を申し請けられければ又五郎男を師とするより外の才覺候はじとぞ、のたまひける。かの又五郎は、老いたる衛士の、よく、公事に馴れたるものにてぞありける。近衛殿、著陣し給へる時、膝突を忘れて、外記を召されければ、火たきて候ひけるが、『まづ、膝突を召さ

と、御庭にて火焚きをりし老衛士の又五郎は「何よりも第一に小半疊の敷物を持ち來よと仰せらるべし」と小聲にてつぶやきしが、さすがに儀式何かの事に精しき男と感心せられたり。

●第百三段

後宇多上皇の御所の大覺寺に於て、近侍の誰彼、なぞ〳〵の戯れ最中、典藥頭丹波忠守來られしに、侍從大納言公明卿は「我朝の物とも見えぬ忠守かな」と謎にせられたるが、これを「唐瓶子」と解きて笑はれし故、忠守は立腹して退出せり。

忠守と忠盛とは、よみ相通じ、平氏と瓶子とも亦音相通ずるにより「唐瓶子」と解かれたるなり。

るべくや候ふらん』と、しのびやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

註解　尹大納言光忠入道は、彈正尹源光忠公。●追儺の上卿は、追儺は、まめまき。おにやらひ。十二月の晦日に行はる儀式。今は節分に行ふ。上卿は、追儺執行の際の奉行。●洞院左大臣は、藤原實泰公。●申し請けは、尋ぬること。●才覺は、ふんべつ。考へ。しあん。●衛士は、古昔、諸國より京に召され、毎年交替して禁闕を守りし者。又、誤りて仕丁の稱に云ふ。●著陣は、節會などの時に陣の席に著くこと。陣は、古昔、衛士の禁裏に出仕して列坐せしこと。又、其衛士の詰所。●膝突は、うすべりの小半疊の敷物。

○第百三段　大覺寺殿にて

大覺寺殿にて、近習の人ども、謎々を作りて解かれける所へ、くすし忠守參りけるに、侍從大納言公明卿、『わが朝のものとも見えぬ忠守かな』と、謎々にせられけるを、『唐瓶子』と、解きて笑ひあはれければ、腹だちてまかり出でにけり。

註解　大覺寺殿は、後宇多法皇を申すなり。法皇嵯峨の大覺寺へおはせし故の稱。●近習は、おつき。近侍。●謎々は、何ぞ〳〵の義。なぞ。●くすし忠守は、醫師にはあらず、典藥頭丹波忠守のこと。●侍從は、古昔、中務省の所屬にして御前の雜事に給仕せし職名。今は、侍從職の職名。●わが朝は、わが國、卽ち、日本。やまと。●まかりは、退出すること。

●第百四段

物さびしく人に氣がれせぬ家に、女子の物忌して世間をとほざかり居る時分、心ぼそく籠りたるを或人が、尋れんとして薄光りの夕月夜に人知れず來られしが、飼犬いたく吠えとがめし所、下女いで來て「どちらから」と云ふに、すぐに案内させて内へ入られたり。たよりすくなき樣みるより、どうして此淋しき不自由の地に日を送るべきかといたく氣の毒なり。見苦しき板敷に暫時立ち居られしが、物馴れてしとやかなる有樣の若き聲にて、「此方へ」と云ふ女ありしが、開閉のせばき遣戸より入り給ひたり。室内の樣子はさほどに荒れず奥床しくも燈火はあちらの方にかすかなるも、飾りつけなどきらきらと見え、今焚きしとも、思ひがたき香のにほひ一入ゆかしく住み居れり。「門をしめよ、雨降るやも計られず、御車は門の軒下におき、御伴の人は彼の間この間に」

○第百四段　荒れたる宿の人めなきに

荒れたる宿の人めなきに、女の、はばかることある頃にて、徒然とこもりゐたるを、ある人とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなき程に、しのびて、尋ねおはしたるに、犬の、事々しく咎むれば、げす女の出でて、『いづくよりぞ』と、いふに、やがて、案内せさせて入り給ひぬ。心ぼそげなるありさま、いかで過すらんと、いと心ぐるし怪しき板敷に、しばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの、若やかなるして、『此方へ』といふ人あれば、たてあけ所、せげなる遣戸よりぞ、入り給ひぬ。

内のさまは、いたくすさまじからず。心にくく、火は、あなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いと懐しう住みなしたり。『門よくさしてよ、雨もぞ降る。御車は門の下に御供の人はそこ〳〵に』と、いへば、『こよひぞ、安きいは、ぬべかめる』と、打ちささめくも、忍びたれど、程なければ、ほの聞ゆ。

さて、この程の事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鶏も鳴きぬ。こしかた行末かけて、まめやかなる御物語に、このたびは、鶏も花やかなる

さいへば、「今宵こそ安心してやすまるべし」と言ふ小聲も遠慮がちなれど、近きゆゑかすかに聞ゆ。さて奥にては久しく御會ひなき間の事いろ〳〵物語り給ふまに鷄鳴きたり。なほも話お續けになれば鷄は聲高くなきに鳴き、最早夜明けしかと尋れ給へど、暗き内に急ぎて歸るべき人目なき土地故、少しゆる〳〵し給ふまに戸のすき白くなりゆきたれば、忘れてならぬ事言ひ殘し、此家を辭されしが、樹

聲にうちしきれば、明けはなるるにやと、聞き給へど、夜ぶかく急ぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れ難きことなどいひて、立ち出で給ふに、梢も、庭も、めづらしく青みわたりたる、卯月ばかりのあけぼの艶にをかしかりしをおぼし出でて、かつらの木の大きなるが隱るるまで、今も見送り給ふとぞ。

註解 はばかることある頃は、物忌などありて世間を遠慮する時分。●夕月夜云云は、夕月の出でし暮方のうす暗きころ。●げす女は、はしため。下婢●やがては、すぐ。●もてしづめたるは、物なれてしとやかなる。けはひは、やうす。有樣

木の枝さては庭一面に青々たる四月の夜明のけしき、非常に美しかりしお思ひだして、桂の木の見えぬ樣になる迄も、かへり見つつ行くと或人云へり。

●第百五段

●いたくすざましからずは、ひどく荒ればてては居らぬ。●俄にしもあらぬにほひは、人のきし爲に急に焚きしとも思はれぬ香のにほひ。●門よくさしてよは、門のしまりをよくせよとの命令。●安きいは、ぬべかめるは、ぬは寢なり、安心して寢ることが出來るとの義。●綺羅は、美服の事にも云へど、此處にては室内の飾り。よそほひ。●夜ぶかき鷄は、一番ごり。●花やかは、高らかにの義。●うちしきれば、鳴きつづくればとの義。●たゆみは、ぐづ〳〵すること。●隙白くは、戸などのすきがあかるく。●めづらしくは、うつくしく。みづ〳〵しく。●卯月は、陰曆四月の異稱。●今も云云は、車の上でも見送り居られたとの義。

○第百五段　北の屋かげに

家の北手のかげに殘れる雪、堅く凍りたるに、寄せた車の長柄にも霜おきて白く、夜明の月かげさえたれども、尙照さぬ所あるに、人氣なき御堂の廊下に並の人ならぬ男女二人、なげしに腰かけ語るさま何事か知られどもはつる時あるまじ。髪容貌ともにすぐれて美しく見え、言ひ知らぬかをりさッと流れきたる、奥床しくも優し。話のはしばしの聞えたる、また何となく墓ばしかり

北の屋かげに、消え殘りたる雪の、いたう氷りたるは、さし寄せたる車の轅も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに人ばなれたる御堂の廊に、なみ〳〵にあらずと見ゆる男、女と、なげしに尻かけて、物語するさまこそ、何ごとにかあらん、盡すまじけれ。かぶしかたちなど、いと美しと見えて、得も言はぬにほひの、さとかをりたるこそ、をかしけれ。けはひなど、はづれ〳〵聞えたるもをかし。

註解 北の屋かげは、家の北手のかげ。●いたうは、いたく。甚しく。●轅は、かぢぼう。●有明の月は、よあけのつき。殘月。●人はなれは、人訪はぬ。人の來ぬ。人げなき等の義。●なみ〳〵ならぬは、普通の身柄でない。●なげしは、なが押しの約言　長押の字を用ふ。敷居の下に横にわたせる材。又、鴨居の上に横さまにわたせる材をも云ふ。●かぶりは、頭髪。かみ。●はづれ〳〵は、はしゞ。

●第百六段

高野の證空上人京都へゆく途中の細き路にて、女の乘りし馬に出あひ、其馬子のあやまちにて上人の乘りし馬を堀の中へ落したり。上人は怒りやすき性なれば忽ち咎め「こ

○第百六段　高野の證空上人

高野の證空上人、京へ上りけるに、細道にて、馬に乘りたる女の行きあひたりけるが、口引ける男あしく引きて、ひじりの馬を、堀へ落してけり。ひじり、いと腹あしく咎めて、『こは、稀有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は

れは意外の亂暴なり、四部の弟子と云ふものはな、僧よりも尼はさがり、尼より優婆塞はさがり優婆夷はさがれり。さる女子の身分にて僧を堀へ蹴りおとす事、世になき惡き仕業なり」と言はれしも、馬子は「何仰せらるるか、一向に分りません」と答へければ上人は一入いきまき荒く「何じや、道知らず、學問なしの男」と聲高く言はれしが、此上もなく言ひすぎたりと思はれしさまにて、馬を返しこそこそと去られたりこれは、尊き口論と言うて可なるべし。

●第百七段

女より言ひかけたれる時の返

劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。かく、優婆夷などの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の惡行なり』と、いはれければ、口引の男、『いかに仰せらるゝやらんえこそ聞きしらね』と、いふに、上人、なほ息まきて、『何といふぞ、非修非學の男』とあららかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひけるけしきにて、馬引きかへして、逃げられにけり。尊かりけるいさかひなるべし。

註解　高野は、紀州の高野山。寺を金剛峰寺と云ひ、眞言宗古義派の大本山、弘法大師の建立。●いと腹あしくは、極めて短氣にして立腹しやすき性質。●稀有の狼藉は、けしからぬふれい。●四部は、四衆ともいふ。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の稱。比丘は男僧。比丘尼は女僧。優婆塞は、俗人にして佛門に入りし男。優婆夷は、俗人にして佛門に入りし女。●えこそ聞きしらねは、わけが分らぬ。●なほ息まきては、息まきは、敦圖の字を用ふ。いきざし荒く。まだせきこみて●非修非學は、道も知らず學問もないと云ふ程の意。●放言云云は、怒鳴つた雜言を自身に恥ぢたやうすで、こそ〳〵と去られた。●尊かりけるいさかひは、あがむべき諠譁との義にて、上人が雜言を反省せられしを指して云ひし語。

○第百七段　女のものいひかけたる返事

女のものいひかけたる返事、とりあへず、よきほ

事、すぐさまよき加減にする人は、稀なりとて龜山上皇の時代に、ふざけた女官達、若き男達が參内さるる度に、「時鳥おきき遊ばされしか」と尋ねためせしに、「大納言の某は「風流の仲間入の出來ぬ私は、まだ聞きません」と答へられたり。堀川内大臣殿ば、岩倉にて聞きしやうに思ひます」と、申されたり。女官達は「此返事はむきずなり風流の仲間入の出來ぬ身はの方は、いささか困れり」などと批評しあはれたり。

そうして男は、女に笑はれざる樣に養育すべきものとぞ。

「淨土寺前關白殿は、幼少の頃、安喜門院の丹誠にかけ敎へ上げし故に、御言葉使の如きも美し」と、或人の申されたりとか。山階左大臣殿は、賤しき下女が、お見かけ申しても「非常に恥かしく氣がおける」と仰せられたり。女と云ふもの居らぬ世ならば、襟をつくろひ冠を正す人もあるまじ。

ごにする男は、ありがたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男たちの參らるゝごとに、『時鳥や聞き給へる』と、問ひて試みられけるに、『某の大納言とかや、『かずならぬ身は、え聞き候はず』と、答へられけり。堀川内大臣殿は、『岩倉にて聞いて候ひしやらん』と、仰せられたりけるを、『これは難なし。數ならぬ身むづかし』など、定めあはれけり。

註解　とりあへずは、すぐさま。●しれたる女房ども、物ずきの女官たち。ふざけた女官等。●數ならぬ身は、和歌など知らぬ不風流の私との意。●堀川内大臣は、岩倉具守公

●定め云云は、批評されしとなり。

すべて、男をば、女に笑はれぬやうに、おほし立つべしとぞ、『淨土寺前關白殿は、をさなくて、安喜門院の、よく敎へ參らせさせ給ひける故に、御ことばなどのよきぞ』と、人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、あやしの下女の、見奉るも、『いとはづかしく、心づかひせらるる』と、こそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠も、いかにもあれ、引きつくろふ人も侍らし

註解　おほし立つは、生し立つ。そだつ。養育す。●淨土寺前關白は、九條師敎公。●安喜門院は、後堀河天皇の后の藤原

斯樣に人に恥かしく思はるる女、どれ程すぐれし者かと思ふに、女の性質は皆まがれり自他の區別を立て、自分のみ大切にする念深く、慾は甚だしく、物の道理を辨へず只迷の方へ心はやく移り、物言ひうまく、差支なき事にても此方より尋れば答へず。注意しての事かと思へば然らず淺間しき事まで自身に口にす。非常に欺き飾ることは男の智にも勝るかと思へば、其虚言の皮のあさより剝ぐるに氣づかず。不正直にして拙なるは女なり。かかる者の思ふ通りになり、よく思はれんとするは好ましからず。故に、何しに女がはづかしかるべき。若し賢女があらば、それも寄りつき難く物凄まじからん。一途に色に迷ふことを主として女の心に從ひ居る時、優しとも面白しとも思はるべきなり。

●第百八段

有子。●山階左大臣殿は、洞院左大臣實雄公。●あやしは、賤し。●引きつろふ人も云云は、なほす人も有るまい。

かく、人に恥ぢらるる女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は、みな、ひがめり。人我の相深く、貪欲甚しく、ものの理を知らず、たゞ迷の方に、心も早くうつり、ことばもたくみに苦しからぬ事をも、問ふ時はいはず。用意あるかと見れば、また、淺ましき事まで、問はずがたりに言ひ出す。深くたばかり飾れる事は、男の智惠にも勝るかと思へば、そのこと、あとよりあらはるるをも知らず。すなほならずして、つたなきものは女なり。その心に從ひてよく思はんことは、心憂かるべし。

されば、何かは、女のはづかしからん。賢女あらば、それも、ものうとくすさまじかりなん。只迷を主として、彼にしたがふ時、やさしくも、面白くおぼゆべき事なり。

註解　ひがめりは、心がまがれり。●人我の相深くは、他人と自己との區別を立て、自己のみ大切にする念ふかく。●たばかるは、だます。あざむく。●只迷を主としては、偏に色に迷ふ事をおもとして。

○第百八段　寸陰を惜む人なし

少しの時間にても重んずべきを、これを大切にするものなし。能く其理を知りて然るか愚なる故に然るか。愚にして怠惰の人の爲に一言せんに、僅かの一錢を積まば貧者も富者となる故に、商人は一錢をもいたく、大切にす。瞬間に氣つかれども過ぎに過ぐれば年よりて死期忽ち到來す。故に佛道の修業者は日や月を惜しまずに、目前の瞬間の過ぐる事を大切にすべし。もし人來て、君が生命明日は屹度なくなるべし知らせなば今日の暮れてしまふ迄、何事をあてにし何事をする事が出來べき吾人等が生きて居る今日の日も、矢張明日死すると言はれし日と違はず。一日中に飲食や大小便をし、いねるも言ふも歩くも據どころなく多くの時間を費せり。其餘りの時間いか程もなき中に、無益の物事に時や日や月を送り、一生を潰すは極めて愚なり。

謝靈運は法華經を漢譯せる程の佛道信者なりしも其心は天

寸陰を惜む人なし。これ、よく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人の爲にいはゞ、一錢輕しといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の、一錢を惜む心切なり。刹那おぼえずといへども、これをはこびて止まざれば命を終ふる期、忽に到る。されば道人は、遠く、日月を惜むべからず、ただ今の一念、空しく過ぐることを惜むべし。

註解

寸陰は、わづかの時間。●惜むは、おもんずるを云ふ。●刹那は、極めて短き時間、一彈指する間。一瞬時。●はこび(運)ては、時間のたつを云ふ。●一念は、最も短き時間。此句は、一日や一月を大切に思ふよりも、目下の寸時を無益に消費すまじきぞとの義。

若し、人、來りて、『わが命、あすは、必ず失はるべし』、と告げ知らせたらんけふの暮るる間、何ごとをかたのみ、何ごとをか營まん。われらが生ける今日の日、何ぞ、その時節に異らん、一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずして、多くの時を失ふ。その餘のいとまいくばくならぬ中に、無益のことを爲し、無益のことを言ひ、無益のことを思惟して時を移すのみならず、日を消し、月をわたりて、一生を送る。

下の風雲を待ちたるが故に、慧遠法師は白蓮社中の人となるを承知せざりき。寸時にても時間を重んずる心なき時は死人も同樣なり。時間は何故に大切にするかと言へば、心中には無益の事を思はで外には世事に關せで、止觀せんとする者は止觀し、修行せんとする者は修行すべしとなり。

尤も悲なり。

註解 便利は、大小便。

謝靈運は、法華の筆受たりしかども、心、常に風雲の思を觀ぜしかば、慧遠、白蓮のまじはりを許さざりき。しばらくも、これなき時は、死人に同じ。光陰、何の爲に惜むとならば、內に思慮なく外に世事なくして、やすむ人はやすみ、修せん人は修せよとなり。

註解 謝靈運は、宋代の人、詩に名あり。●法華の筆受は、法華經の梵語の飜譯を唐字に筆記すること。●風雲の思は、世にあらはれ出づる機會となる天下の事變を待つの心。謝靈運は晉の臣なりしが故、再び以前の世とせんものとの事を忘れざりしとなり。●慧遠は、晉時代の大覺法師、廬山虎溪東林寺に住せり。●白蓮のまじはりは、白蓮社の交際、社は慧遠師一味の人々の結社。●しばらくもこれなき時はは、暫時にても光陰を大切にする心がない時分は。●上欄の止觀は、禪定を修めて、內心に起る散亂妄想の動搖を止め、事理を照見し諸法を識別すること。

●第百九段

木のぼりの名人、或人にさしづして高き木の枝を伐たせたり。危く見えし時は無言にて軒の高さの處におりくる頃「用心せよ」と言ひき。「斯く

○第百九段　高名の木のぼりといひし男

高名の木のぼりといひし男、人を捉てて、高き木にのぼせて、梢を切らせしに、いとあやふく見えし程は、いふこともなくて、下るる時に、軒だけばかりになりて、『あやまちすな、心して下りよ』

飛びおりらるべき低きを何故にかく言ふぞ」と問ふ人ありしが、「さればなり、目まふ高き枝上にては自ら用心するゆゑ言はず。失策は屹度安き所にて致します」と答へたり賢しき男なれども聖人の訓誡に合へり。蹴鞠も難所すぎてあなどれば、えてして落すものぞと、斯道の人が言ひしとか。

と、ことばをかけ侍りしを、『かばかりになりては、飛び下るとも下りなん。いかに斯くはいふぞ』と、申し侍りしかば、『その事に候ふ。目くるめき、枝あやふきほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。過は、やすき所になりて、必ず仕ることに候ふ』と、いふ。あやしき下郎なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も、難き所を蹴出して後、やすく思へば、必ず落つると侍るやらん。

註解 高名は、名高きこと。なうて。有名。●掟ては、さしづして。●心しては、用心して。●聖人のいましめは、聖人の訓戒。易に「君子安而不忘危」とあり。㊀やすく思へば

●第百十段

双六の名手に其勝つべき方法を尋ねしに「勝たうとしてうたず、負くまじとうつべし。どの手が早く負くべきかと考へて其手を用ゐず、一目でも遅く負くる方の手を用ふべしと答へたり。よく其道に精しき教訓にて、身を修め國家を保有する道も、これと同樣なり。

は、たやすいと油斷をすると。

○第百十段　雙六の上手といひし人に

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、『勝たんとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手か、とくまけぬべきかと案じて、その手をつかはずして、一目なりとも、おそく負くべき手につくべし』と、いふ。道を知れるをしへ、身を修め、國を保たん道も、また、然かなり。

註解 雙六は、一種の遊戯。雙六盤に黑白の石おのゝ十二を式の如く並べ、二個の采(さい)を竹の筒に入れて振出し、其

●第百十一段

碁打や双六の勝負事を好み、徒らに時間や月日をつぶす人は、四重五逆の上に出づる悪業と思ふ」ぞと或高徳の僧の仰せられし事、感心のあまり今尚忘れずに居る。

出でたる敷だけづつ石を送り、早く敵陣に入りこみたるを勝とするもの。和漢共に行はる。●てだては、手段の字を用ふしかた。方法。

○第百十一段　圍碁雙六好みて

『圍碁雙六好みて、あかしくらす人は、四重五逆にもまされる悪事とぞ思ふ』と、ある聖の申ししこと、耳にとどまりて、いみじくおぼえ侍る。

註解　四重は、殺生・偸盗・邪婬・妄語の四つの禁戒。●五逆は、佛道にては父を殺すと、母を殺すと、佛身より血を出すと、阿羅漢を殺すと、和合の僧を破ることの五罪悪。その一を犯す時は、無限地獄に落つむ云へり。普通にては君を弑すると、父を殺すと、母を殺すと、祖父を殺すと、祖母を殺すことの五罪悪、何れも極刑に行はるるものとせり。●ある聖のは、去る高徳の僧の。

●第百十二段

明日は遠旅に上るべしと言ふ人に、心靜かになすべき事を言ひかくる人は無かるべし。急なる大事をなし、いたく悲しきことの有る人は、ほかの事を耳に入れず、他人の愁ひや喜びも尋ねず。又見舞はざりとて、何故に尋ねざりしかと恨む人もなし。さうすると年も次第に老い、病氣にも取

○第百十二段　明日は遠國へ

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心しづかになすべからんわざをば、人、いひかけてんや。俄の大事をも營み、切になげくこともある人は、他のこと聞き入れず、人の愁喜をもどはず。訪はずとて、などやと恨むる人もなし。されば、年もやう〳〵たけ、病にもまつはれ、いはんや、世をも逃れたらん人、また、これに同じかるべし。

註解　聞かん人には、云ふ人に。●などは、なぜ。何故。やと

りつかれたり、況して世をさけた人も　亦是等と同様なり此世に處する百般の用事一として關係せずにすむものなしこの俗事すてかぬるによりて其凡てを濟まさんとすれば希望も多く身體も苦しく、心のやすまる暇もなく、一生涯ごたゝくの小義理にほだされ、徒らに死にはつべし。日は暮れて前途遠けき喩へ、年よりて吾が修行は至らず、もはや時機をも失へり。百般の用事は、抛つべき時なり。お互の

を添へては、なぜがと。

人間の儀式、いづれの事か、さりがたからぬ。世俗のもだし難きに從ひて、これを必ずとせば、願も多く、身も苦しく、心のいとまもなく、一生は雜事の小節にささへられて、空しく暮れなん。日暮れ道遠し。わが生、既に蹉跎たり。諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を得ざらん人は、物狂ともいへ、うつつなし、情なしとも思へ、そしるとも苦しまじ。ほむるとも聞き入れじ。

註解　人間の儀式は、吾人が此世に處する百般の用事。●もだし、默止すること。●必ずとせば、は一々屹度せねばならぬとしたならば。●雜事の小節は、ごたゝくしたつまらぬ義理だて。●日暮れて道遠しは、年既に老いて前途する所は遠きを云ふ。白樂天の傳に「日暮道遠、吾生既蹉跎」と見ゆ。●放下は、なげすつること。●諸緣は、浮世のすべての關係。●物狂は、きちがひ、狂人。●うつつなむは本心なし。

約束も守るまじく、禮儀と云ふ事をも心にかけまじ。斯う悟らぬ人は狂人といはば言へ本心なし、人情なしとも思へ非難されても苦しく思はず、譽めらるるとも耳に受けず。

第百十三段

四十を越えたる人、好色を自ら愼しみてかくすは仕方なきも、口に出して男女の戀愛關係の事につき、他人の事を言ひふざくるは、四十越せし人に不似合にて見苦しく、大抵聞きづらく見にくき事は、老年し、默止すること。●必ずとせば、は一々屹度せねばならぬとしたならば。●雜事の小節は、ごたゝくしたつまらぬ義理だて。●日暮れて道遠しは、年既に老いて前途する所は遠きを云ふ。白樂天の傳に「日暮道遠、吾生既蹉跎」と見ゆ。●放下は、なげすつること。●諸緣は、浮世のすべての關係。●物狂は、きちがひ、狂人。●うつつなむは本心なし。

○第百十三段　四十にもあまりぬる人の

四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづから忍びてあらんは、いかがはせん。言にうち出でて、男女のこと、人の上をも、いひたはるこそ、にげなく、見苦しけれ。おほかた、聞きに

の人が若手の中にまじりて面白がらせんと物言ふ事。人の中に入らぬ程の賤しき身分にて、高位高官の人の事を心やすきやうに言ふ事。貧乏なる身にて酒宴をしたがり、客に馳走すべしとて華美にする事

●第百十四段

今出川の大炊殿、嵯峨へ御住の頃、有栖川附近の水の流れを居る所にて、牛飼の齊王丸、

興あらんと、物言ひたる。數ならぬ身にて、世のおぼえある人を、隔なきさまにいひたる。貧しき所に、酒宴好み、客人に饗應せんときらめきたる

註解　忍びては、かくして。●言にうちいでては、口にだして。●男女のことは、男女の戀愛關係の事。●いひたはるこそは、言ひふざけるのが。●にげなくは、四十越した人につりあはぬ。●數ならぬ身は、人かずに入らぬ賤しき身分の義。●おぼえある人は、高貴の方。●饗應は、とりもち。ちそう

○第百十四段　今出川のおほい殿

今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、ありす川のわたりに、水の流れたる所にて、さい王丸、牛をかけさせし所、そのはれし水、御車の前板をよごしたり、隨身の爲教車後に居りしが「けしからぬ馭者の童かな水のある所にて、御牛をかけさするとこそ云ふ事があるものか」と言ひしに、大炊殿は御顏色をかへ「汝は牛使ふこと齊王丸の上こしては知るまじけしからぬ男じや」と、御車に爲教の頭を打ちつけられて怒られたり。牛飼ふに名高き齊王丸は、太秦殿の下男にて其乘車の牛の馭者なりき。こ

御牛をおひたりければ、あがきの水、前板まで、さとかかりけるを、爲教、御車のしきりに候ひけるが、『稀有の童かな、かかる所にて、御牛をば追ふものか』と、いひたりければ、おほい殿、御氣色あしくなりて、『おのれ、車やらんこと、さい王丸にまさりてえ知らじ。稀有の男なり』とて御車に頭をうちあてられにけり。この高名のさい王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はことづち、一人はうばら、一人はおとうし、とつけられけり。

の太秦殿は牛を愛せらるあまり、侍婢の名にまでひささちことづち、はうばら、おとうし等の名をつけられたり。

●第百十五段　攝津の宿河原にて、虚無僧多く會して念佛し居りしが、門外より來し虚無僧「若しや此にいまをしを申さるる虚無僧は居給はずや」と問ひしに「いろをしは此に居ります。問ひ給ふは何樣ぞ」と返事したるに「自分は白梵字といふものなり、自分の師匠某といふもの東國にて、しろをしと云ふ虚無僧に殺害されしと聞きし故、逢ひて仇討せんというて御尋ねせしなり」と云ふ。心ろをしは「殊勝にも尋れ給へり、如何にも其事ありき。今品の念佛を申しけるに、外より入り來るぼろ〳〵の、『もし、この中に、いろをし坊と申すぼろやおはします』と、尋ねければ、その中より、『いろをし、こゝに候ふ。かくのたまふは誰そ』と、答ふれば、『しら梵字と申すものなり、おのれが師なにがしと申しし人、東國にて、いろをしと申すぼろに殺されけりと、承りしかば、その人に逢ひ奉りて、恨み申さばやと思ひて、尋ね申すなり』と、いふ。いろをし『ゆゆしくも尋ねおはしたり。さる事侍りき。此處にて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へ參りあはん。あな

註解　今出川のおほい（大炊）殿は、菊亭兼季公。●ありす川は、有栖川。洛西嵯峨村にある小川。●さい王丸は、馭者の名。●あがき（足掻）の水は、牛の歩む折にはねあがりし水。●前板は、車の前面の板。●爲敎は、隨身の名。●しきりは事の後。●希有は、此處にては、けしからぬとの義。●高名のは、牛飼にて名うての。●太秦殿は、坊門内大臣藤原信清公。●料の御牛飼は、太秦殿が召料の牛飼。むかしは、牛に車をひかせたり。●女房の名どもは、太秦殿は牛を愛さるるあまり、その女中達もとの義。●ひざさちは、膝幸。こづちは、停槌。はうばらは、胞腹。おとうしは、乙牛。

○第百十五段　宿河原と云ふ所にて

宿河原といふ所にて、ぼろ〳〵、多く集りて、九

此にて御相手せば道場をけがすにより、前なる河原にて致すべし。ああ、どうか諸君、双方へ味方してくれ給ふな、他人の迷惑にならば佛事の邪魔になります」と約束して、二人は河原にてはたし合ひ、双方共にさしたがへて死にたり。虚無僧は古昔はなかりしものか、方今ぼろんじ、梵字漢字など云ふもの、其起原なりとぞ。世をすてしに似るも我執深く、佛道を願ふに似るも爭ひを專らとす。我儘にしかしこ、わきざしたち、いづ方をも見つき給ふなあまたのわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし』と、いひ定めて、二人、河原へ出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死ににけりぼろ〳〵といふもの、昔はなかりけるにや、近き世にぼろんじ、梵字、漢字などいひけるもの、そのはじめなりけるとかや。世を棄てたるに似て、我執深く、佛道を願ふに似て、鬪諍を事とす。放逸無慙のありさまなれども、死を輕くして、少しもなづまざる方の、いさぎよくおぼえて、人の語りしままに、書きつけ侍るなり。

註解　ぼろ〳〵は、虚無僧のこと。ぼろ（梵論又ば暮露）。ぼろんじ（梵論字）。●九品念佛は、念佛の異稱。念佛を唱ふれば、極樂往生すると云ふよりの名。九品は、極樂往生の等級、上中下の三品あり。又、そのおの〳〵に上中下の別あり都合九つに分る。●誰そは、たれぞ。●恨み云云は、仇討しやうと考へて。●ゆゆしくもは、天晴れよくもと云ふ程の義殊勝にもにてもよし。●道場は、佛道を說き佛道を修むる所●わづらひは、なんぎ。めいわく。●わきざしたちは、脇座氏達なり。そばの人々。●いづ方をも云云は、どちらにも助太刀なざるなとの義。●心ゆくばかりに云云は、思ふ存分に互に刺しあひ。●ぼろんじは、梵論字。虚無僧。●我執は、心の所證に執着して我を立つること。●鬪諍は、あらそてはち知らざれども、死を視ること歸するが如く、露ほどもためらはぬ點、いさぎよく思はれたる故、人の言ひしまを斯くも筆にしたるなり。

●第百十六段

寺院の稱號、其他すべての物に名をつくる事、古人はかしきを求めず、只有のままに容易く命じたり。方今は深く考へ工夫の如何を見せんものと思はるるは、極めて困りし仕方なり。人の名も同じ事にて、見馴れぬ文字をつけんとする、無益のわざなり。萬事

ひ。けんくわ。●放逸無慙は、きままにしてはぢを知らぬこと。●少しもなづまざる方のは、露ほどもためらはぬ點が。聊かも滯らぬ所が。

○第百十六段　寺院の號

寺院の號、さらぬよろづの物にも、名をつくること、昔の人は、少しも求めず、只ありのままに、易くつけるなり。この頃は深く案じ、才覺をあらはさんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目なれぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事も、めづらしきことを求め、異說を好むは、淺才の人の、必ずあることなりとぞ。

珍らしきを詮議し、變りし獸をよろこぶは、淺薄なる人物の、えてして有ることなり。

●第百十七段

友人として交際して悪きもの七つあり。高位高官と、若き人と、無病にて强き人と、酒すきと、猛勇なる人と、虛言吐く人と、慾深き人となり。交際してよき友人三あり。物くろる人と、醫師と、智慧あ

註解　さらぬよろづの物は、寺院の名以外すべての物。●才覺云云は、如何にもして工夫の程を見せやうと。●いとむづかしは、どうも感心せぬ。こまつたものじや。●淺才の人のは珍しい事柄や變つた說を喜ぶのは、淺はかなる人物の。●必ずは、えてして。きツと。

○第百十七段　友とするにわろきもの

友とするにわるきもの、七つあり。一には、高くやんごとなき人。二には、若き人。三には、病なく身强き人。四には、酒を好む人。五には、たけく勇める人。六には、そらごとする人。七には、欲深き人。よき友、三あり。一には、物くるる人

る人となり。

●第百十八段

鯉の汁食ひし其日は、鬢の毛亂れぬものと云ふ。鰾膠にも製せらるるもの故、粘着力のききめかとも思はる。鯉のみは陛下の御前にても料理せらるるもの故、たツときき魚類なり。鳥の中にては雉子が無双のものなり。雉子や松茸は、御料理の間にさげてあるも差支なけれど、是等以外のものは不可なり。中宮の御方の御料理の間の黒ばみ、棚の上に、雁のありしを北山入道殿うち見て、歸後手紙にてあんな物が其姿なりにて御棚におく云ふ事は、見しためしなし、體裁あしきものなり。善く物事の道理をわきまへ、しつかとしたる人物が御側に

二には、くすし。三には、智惠ある人。

註解　高くやんごとなき人は、高位高官。諛ふが故に惡し。●若き人は、社會の經驗なき故に惡し。●病無く身強き人は、放逸にして思ひやりなき故に惡し。●酒を好む人は、人に迷惑をかくる故に惡し。●たけく勇める人は、自分の勇をたのみて身をほろぼし人を誤る故に惡し。●そらごとするは、虛言する。●くすしは、醫師。

○第百十八段　鯉のあつもの食ひたる日は鬢そそけずとなん。

鯉のあつもの食ひたる日は、鬢そそけずとなん。膠にも造るものなれば、ねばりたるものにこそ。

註解　あつもの(羹)は、すひもの。しるのもの。●そそけずと亂れずと。●膠にもは、鯉の皮よりほにべ(鰾膠)を製せらるるより云ひし語。●ねばりは、粘着力。

鯉ばかりこそ、御前にても切らるるものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉、さうなきものなり。雉、松茸などは、御湯殿の上にかかりたるも苦しからず。その外は、心うきことなり。

註解　御前は、陛下の御目通り。●やんごとなき魚は、尊き魚。●さうなきもの(雙無き物)は、ならびなきもの。●御湯殿は御料理の間。●心うきことは、いとはしき事。

中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山入道殿、御覽じて、かへらせ給ひてやがて、御文にて、『かやうのもの、さながらそ

居ぬ故なり」など、書き送られたり。

●第百十九段

鎌倉の海に産する鰹は、其地にては他に比類なく此頃もてはやす魚なり。鎌倉の老人が

のすがたにて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはず、さまあしきものなり。はかゞしき人の候はぬ故にこそ』など、申されたりけり。

註解　中宮は、皇后。後世は、皇后の外に設けられたる妃の位。此處にては、後深草帝の皇后。●北山入道は、中宮の御父西園寺實氏公。●さながら云云は、料理もせぬ雁を其ままの義。●ゐては、率てなり。持ち來りての義。●はかゞしき人は、善く物を辨へたしッかりしたる人物。

○第百十九段　鎌倉の海に

鎌倉の海に、鰹魚といふ魚は、かの境には、さうなきものにて、この頃、もてなすものなり。それも、鎌倉の年寄の申し待りしは、『この魚、おのれら若かりし世までは、はかゞしき人の前に、出づること侍らざりき。頭は、下部も食はず、切り棄て侍りしものなり』と、申しき。かやうのものも、世の末になれば、上樣まで、入りたつわざにこそ侍れ。

註解　鎌倉は、相模國鎌倉郡今の鎌倉町。●もてなすは、もてはやす。賞玩す。●はかゞしき人は、上流の人。●入りたつわざは、入りこむ事。

言ひしことばに「此魚は自分等が若き時迄は、身分のある御方の前に差上げもせざりき頭部は下等なる人も食はずに棄てたり」と言へり。魚までが世の末に至れば、上流社會までも入込む事となれり。

●第百二十段

支那の物は、藥品の外のもの

○第百二十段　唐の物は

唐の物は、藥の外は、なくとも、事かくまじ。書

無くさも不自由はあるまじ。書物如きは我日本に澤山あるにより、書き寫せば可。支那船の遠き海を渡り、無用の物品ばかりを積み運び、數多輸入するは愚極なり。「遠地の物品を寶とせずとも又、得にくきたからを尊重せず」ともと、書物にも書かれあると云ふ事なり。

どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きも寫してん。もろこしぶねの容易からぬ道に、無用の物どものみとり積みて、所せく渡しもてくる、いと愚なり。『遠きものを寶とせず』とも、又、『得がたきたからを貴まず』ともと、書にも侍るとかや。

註解 唐の物はは、支那の品物は。●もろこしぶねは、唐土船支那の船舶。●遠きもの云云は、尚書即ち書經に「遠き物を寶とせざるときは、卽ち遠人格る」の語に基づく。●得がたき寶の句は、老子に「得難き貨を貴ばざれば、民をして盜を爲さざらしむ」との語に出づ。

人家にて飼養すべきものは馬や牛。つなぎ不自由みするは不憫なるも、必要の獸のゆゑ致しかたぞなき。犬は番するもの故、その役目は人の上なればき是非飼養すべき性質のものなり。併し、家々に飼ひあるゆゑ、わざと好みて養はずとも可るべし。

前の外の獸は、みな無用のものなり。かくる獸は檻に入れて錠おろし、飛ぶ鳥は羽子をきりて籠の中に入れられ、む

○第百二十一段　養ひ飼ふものには

養ひ飼ふものは、馬牛、つなぎ苦むるこそいたましけれど、無くてかなはぬものなれば、いかがはせん。犬は守りふせぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど、家ごとにあるものなれば、こととさらに求め飼はずともありなん。

註解 いたましは、ふびん。かあいさう。●いかがはせんは、仕方がない。●こととさら(殊更)には、わざと。別段に。

この外の鳥獸、すべて、用なきものなり、走る獸は、檻にこめ、鎖をさされ、飛ぶ鳥は、翼を切り籠に入れられて、雲を戀ひ、野山思ふ愁、やむ時

かし飛びし空をなつかしみむかし遊びし野山をしたふ悲しみ、常に絶えまなし。其心を吾が身にひきくらべて堪へがたくは、なさけある人は鳥獸を捕へて樂しむわけなし。生物をくるしめて見て嬉しがるは、桀王や紂王の心と違ふ所ぞなき。王子猷は鳥を好みしも、林間に遊ぶを樂しみたるにて、捕へて辛き目に遭はせしには非ず。すべて「珍禽奇獸は國に養ふものに非ず」と書にも戒れり。

なし。そのおもひ、わが身に當りて忍び難くは、心あらん人、これを樂まんや。生を苦めて、目を喜ばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂ぶを見て、逍遙の友としき。捕へ苦めたるにはあらず。およそ、『めづらしき鳥、あやしき獸、國に養はず』とこそ、書にも侍るなれ。

註解 雲を戀ひ云云は、鳥は空高く飛び、獸は山林原野にかけ遊ぶを忘れ得ぬかなしみ。●心あらん人は、なさけある人。●桀紂は、夏の桀王と殷の紂王と。共に惡虐無道の君主にして、人を殺しなどして喜びたり。●王子猷は、竹を愛して、一日し此君なかるべからずと云ひ、その林間に鳥の栖みて鳴き遊ぶを喜べり。●めづらしき鳥の一句は、尚書の「珍禽奇獸、不レ育レ于レ國」の語に出づ。

●第百二十二段

人の才智藝能は、四書や六經に達し居るを以て第一におくつぎは手蹟のいみじき事、文字書くを專門とせずとも手習するぞよき。學問の助けとなる故なり。その次には醫術を學ぶべきぞ。自身の衛生さては人を救ひ、忠と孝とも醫術でなくば盡しがたし。次は弓術や馬術、これは六藝にも見

○第百二十二段　人の才能は

人の才能は、書あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。つぎには、手かくこと、宗とすることは無くとも、これを習ふべし。學問にたよりあらん爲なり。つぎに、醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらずばあるべからず。つぎに、弓射、馬に乘ること、六藝に出せり。必ず、これをうかがふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばんを

ゆ。是非これを知るを要す。文と武と醫との三つは、實に缺くべからざるものなり。この三道を習ふのを、無益なる事をする人と云ふべからず。又その次には、天の與へし食事ゆゑ、よく料理を心得居る人は、淺からぬ德とすべし。つぎに細工物にて、何かにつけて必要ぞ多き。

前の外にさまざまなる事あれど、藝能の多きは君子の恥辱とする所なり。詩歌を善くし音曲に上手なのは、深くして

ば、いたづらなる人といふべからず。つぎに、食は、人の天なり。よく、味を調へ知れる人、大なる德とすべし。つぎに、細工、よろづの用多し。

註解 才能は、才智藝能。卽ち智慧のはたらきと身に得たる藝。●書は、四書六經を云ふ。●聖の敎は、聖賢の敎。●手かくことは、文字書くわざ。●むれとするは、專門とする。●忠孝のつとめは、忠義と孝行をすること。小學に曰く「病みて床に臥す、之を庸醫に委する、之を不慈不孝に比す。親に事ふる者は、亦醫を知らずんばあるべからず」と。●六藝は、禮・樂・射・御・書・數の六つのわざ。●食は人の天なり。食事は天の賦與の義。尙書に「夫れ食は人の天なり」と。又史記酈食其傳にも「民人は食を人て天と爲す」と見ゆ。

たやすく知りがたきわざにして、古昔の人君や臣下は重んぜしかども、近世は之を治世の具とせず度外視するが如し。黃金は非常に貴重なるも、鐵の實用多きに及ばぬと同一なるに似たり。

この外のことども、多能は、君子の恥づるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣之れを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治ること、やうやくおろかなるに似たり。金はすぐれたれども鐵の、益多きに如かざるが如し。

註解 多能は君子の恥づるところは、多能は藝能の多きこと。蓋し此にては、鄙俗の事に就きての多能は、君子の忌み嫌ふ所との義。論語子罕篇は「吾れ少かりしとき、賤しかりき。故に鄙事に多能なり、君子多ならんや、多ならず」と見ゆ。●絲竹は、琴の類と笛の類。管絃、轉じて音樂。●幽玄の道は、深くして容易に窺ひ知るべからざる敎へ又はわざ。詩

●第百二十三段

役にたたぬ事して、時間をつぶすを愚人とも、不道理なる事する人ともいふべし。國家や主君のため、是非せざるべからざる事多し。その餘暇果して幾何ぞや、考へて見るぞよき。人の身に餘儀なくする事は、第一に食物、第二に衣服、第三に住家なり。人間の大切なる事は此衣食住の三にすぎず。うゑず、凍えず、雨や風にさらされずして心安く世を送るを樂みとなす。併し、人には病氣と云ふもの有るにより、それに罹れば心配たへがたし。衣食住に醫藥を加へて四の事、身に得かぬるを貧乏とし。此四つ自由なるが富有とす。これ以外を欲するをおごりと爲す。四の事にさへつづまやかなれば、誰か不滿足の生活とや云ふべき。

●第百二十四段

獸絲竹を併せて、古の所謂禮樂の義。●君臣の句は、古昔の主君たり臣下たる者は、禮樂を以て治世の要とせしたるとの義。●おろかは、のけもの。疎外。●すぐれたれどもは、貴重なれども。

○第百二十三段　無益のことをなして

無益のことをなして、時を移すを、愚なる人ともひがことする人ともいふべし。國の爲め、君のため、やむことを得ずしてなすべき事多し。その餘のいとま、いくばくならず、思ふべし。人の身にやむことを得ずして營む所、第一に食物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三に過ぎず。飢ゑず、さむからず、風雨に犯されずして、靜に過すを樂とす。ただし、人、みな病あり。病に犯されぬれば、そのうれへ忍び難し。醫療を忘るべからず。藥を加へて、四つのこと、求め得ざるを貧しとす。この四缺けざるを、富めりとす。この四の外を求め營むを、驕とす。四のこと儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

註解　ひがことする人は、ひがことは僻事、不道理なる事を爲す人。四つのことは、衣・食・住と藥とのこと。●儉約はむだなる費用をせぬこと。おごらぬこと。しツそ。

○第百二十四段　是法々師は

是法々師は、浄土一宗に恥ぢぬ學識を有し乍ら、それを鼻にかけて師匠ぶらず、只々朝夕に念佛のみして、安樂に世を送るあり樣、誰もかく有りたきものなりき。

●第百二十五段

人に死なれて四十九日の佛事する折、或高僧を招きたるに說教上手にて一座の人々隨喜の涙をこぼしたり。其法師歸られしのち、聞きし人々「平生より今日は有難く思ひたり」と感心せし返事に「如何にも

是法々師は、浄土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、ただ、あけくれ念佛して、安らかに、世を過すありさま、いとあらまほし。

註解　是法々師は、念阿の弟子、歌人なり。●學匠をたてずは學識を鼻にかけて師匠ぶらぬ。

○第百二十五段　人におくれて

人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、說法いみじくて、みな人、涙を流しけり。導師かへりて後、聽聞の人ども、『いつもよりも、ことに、けふは尊く覺え侍りつる』と、感じあへりし返事に、あるもののいはく、『何ども

有難かりき、あの樣にお顏が高麗狗に似て居らるるもの故」と或者言ひしに、感心せし事も失せはて、捧腹に堪へざりき。かかる譽めかた、何處にあるべき。又「人に酒を飲ますると、自分先づのみて他に無理にのまするは、劍にて人を斬らんとすると同一なり。劍は兩方に刃つける故ふり上ぐる時先づ自身の頭を斬るゆゑに人をば、斬り得ぬなり。自分がさきに醉臥さば客人は決して飲むまじ」と言

候へ、あれほど、唐の狗に似候ひなん上は』と、いひたりしに、あはれもさめて、をかしかりけりさる導師の譽めやうやはあるべき。

註解　人におくれては、人に死なれて。●請じは、招くこと。きてもらふこと。●導師は、葬式又は佛事の際に主となる僧侶。●あはれもさめては、感心した事も失せて。

又、『人に酒すすむるとて、おのれ、まづたべて人に强ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たることなり。二方に刃つきたるものなれば、もたぐる時、まづ、わが頭を斬る故に人をば斬らぬなり。おのれ、まづ醉ひ臥しなば、人は

ひぬ。剣にて斬りし経験あるかと、非常に可笑かりき。

●第百二十六段
賭博に敗北の極、有る限りをかけんとせば、それを受けて打つは不可。運がよくなり、連勝する時機來れりと知るべし。その時機を察するを、賭博上手と、或人言ひぬ。

よも召さじ』と、申しき。剣にて斬り試みたりけるにやいとをかしかりき。

註解　まづたべては、さきに飲みて。●召さじは、飲むまい。

○第百二十六段　ばくちのまけ極りて

ばくちのまけ極りて、殘りなくうち入れんとせんに、あひてはうつべからず。立ちかへり、つゞけて勝つべき時の至れることを知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなりと、あるもの申しき。

註解　ばくちは、博奕。とばく(賭博)。●あひてはは、それに應じて打つてはならぬ。

○第百二十七段　あらためて

改正して無益なる物事は最初より改正せぬが上策なり。

註解　よしは、上策との義。よい。

○百二十八段

雅房大納言は、才かしこく、よき人にて、大將にもなさばやと思しける頃、近習なる人、『ただ今あさましきことを見侍りつ』と、申されければ、『何ごとぞ』と、問はせ給ひけるに、『雅房卿、鷹にかはんとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ』と、申されけるに、

○第百二十七段

改正して無益なる物事は最初より改正せぬが上策なり。

●第百二十八段

雅房大納言は才ありて賢明に品行も正しき人士にて、近衛大將にのぼさんと思ひ給ひし頃、近侍の人「只今驚き入りたる事見ましてござります」と言ひたり、後宇多院は「何事ぞ」と問はせられしに「雅房卿、鷹の餌にせん爲、生き

たる犬の足をきられしを中垣の破れより見ましてござります」と言ひしが、院はしりぞくる心生じてにくませられ、平生の御機嫌をも害し、大將へ昇進のさたも止みたり。才ありて品行正しき人士が、益なき鷹を所有せられしは意外の事なれども、犬の足の事は虚言なり。虚言は不都合なるも、斯事を聞かせられて憎ませ給ひし院の御心は、いたく尊重すべき事なり。

そうじて生物を殺し、鬪鶏や鬪犬などして面白がるは、禽獸互に食ひ合ふの類なり。諸鳥獸の蟲に至る迄、注意して其さまを窺ふに、親は子を思ひ子は親をしたひ、夫婦つれだち、妬み怒り、慾多く身を大事にかけ、御命を惜しかる事、愚痴一途の畜生ゆゑに人よりも一入甚だし。かかる鳥獸に苦痛を與へたり生命をとる事は、どうして悲しまずに居らるべき。すべて有らゆる心ある生物を見て同情心もたずば、人類にあらず。

うとましく、悪くおぼしめして、日頃の御氣色もたがひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人の鷹をもたれたりけるは、思はずなれど、犬の足はあとなきことなり。そらごとは不便なれども、かかることを聞かせ給ひて、悪ませ給ひける、君の御心は、いと尊きことなり。

註解 雅房大納言は、正二位大納言源雅房卿。●よき人は、品行正しき人物との義。●あさましきは、驚き入つた。あきれた。●うとましくは、遠ざくる心を生じて。●日頃の云云は常々の御機嫌をもそこれ。●思はずなれどは、思ひがけなき事なけれど。かはんとては、鷹の餌にせんと。●そらごとは虚言、犬の足の事は全く形跡なき事柄、そのうそは不都合な

大方、生けるものを殺し、いためたたかはしめて遊び樂まん人は、畜生殘害のたぐひなり、よろづの鳥獸、小さき蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をともなひ、ねたみ怒り、欲多く、身を愛し、命を惜めること、ひとへに愚痴なるが故に、人よりもまさりて甚し。かれに苦みを與へ、命を奪はんこといかでかいたましからざらん。すべて、一切の有情を見て、慈悲心なからんは、人倫にあらず。

註解 大方は、すべて。ぜんたい。●いためたたかはしめては

●第百二十九段

顔回の心は、他人に苦勞かけまじと思へり。そうじて人を苦しめ、ものを殘酷にする事は宜しからず、よし之を下級の人民に加ふるとも、其志を變ぜしむること能はず。又、幼兒をだましたりおどしたり

鬪鷄や鬪犬などして。●畜生殘害は、禽獸がごしぐひすること。たぐひは、類なり。●ひとへに云云は、只々おろかなるが故に、吾人よりも其情が一層ひどい。●いかで云云は、何さして悲しまずに居られやう。●慈悲心は、あはれみの心。なさけ。同情心。

○第百二十九段　顔回は

顔回は、志、人に勞を施さじとなり。すべて、人を苦め、ものを虐ぐること、いやしき民の志をも奪ふべからず。

註解　顔回は、孔子の高弟、顔淵のこと。論語に「子曰く、盡人に苦勞をかけまいとの義。●いやしき民は、匹夫なり。論語に「匹夫不レ可レ奪二其志一」と見ゆ。

又、いときなき子をすかし、おどし、言ひはづかしめて、興ずることあり。おとなしき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、をさなき心には、身にしみて、怖しく、はづかしく、淺ましき思、まことに切なるべし。これをなやまして興ずること、慈悲の心にあらず。

註解　●いときなきは、いとけなき。●おとなしき人は、おとなし大人。●興ずるは、おもしろがるおとなしき人の、喜び、怒り、悲び、樂むも、みはちかかせて面白がることあり。大人は眞實にあらざるゆゑ、何とも思はざれども、年ゆかぬ人の心中には、身にとほる程に怖ろしく、はづかしく、口惜しく思ふ事誠にふかかるべし。これを苦しまして面白がる事、人情深き心にあらず。

大人の喜怒悲歡、みな惑ひなれども、何人かよく眞實の相に拘泥して一途に思ひこまざるべき。身體に傷つくるよりも、心をくるしまするは、人

を害する事更に深し。病氣にかかる事も、大抵は心のせいなり。そこより來る病はまれなり。服藥して發汗せんとするには効能なき事あるも、一たび恥ぢ且つ恐るる事あれば必ず汗かくことあるは、心の作用と云ふ點を知り得べし。凌雲閣の額を書き、しばらくの間に、頭髪白くなりし韓誕の例あるにあらずや。

な、虚妄なれども、誰か、實有の相に着せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふこと、なほ甚し。

註解 虚妄は、まよひ。まごひの義。●實有の相は、實相。即ち虚妄の反、萬有の生滅無情の相を離れたる眞實の相。●著せざるは、執着せぬものはない。●やぶるは、傷づくる。●そこなふは、害する。

病を受くることも、多くは、心より受く。外より來る病は少し。藥を飲みて汗をもとむるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢ恐るることあれば、必ず、汗を流すは、心のしわざなりといふこと

を知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。

註解 一旦云云の句は、嵇康の養生論なる「夫れ藥を服し、汗を求むるときは、或は獲ざることあり。愧づる情一たび集るときは、渙然として流離す」との句に基づく。●凌雲の閣の故事、は三國史に「魏の明帝、凌雲觀を立つ、誤りて先づ榜に釘す、乃ち籠を以て韓誕を盛り、轆轤もて引上げ、之を書せしむ。地を去ること二十五丈。既に下れば、鬚髪皓然たり」韓誕は、當時の書家。

○第百三十段　ものに爭はず

ものに爭はず、おのれを枉げて、人に從ひ、わが

して人に從ひ、吾が事を後にまはし、他の事を先にするにまさるものなし。何の遊び事にても勝負事をすく人は、勝ちて面白がらんかてなり。自分の藝事の上手なるを樂しむ故に、負けて不快を感ずること又、知るべし。自分まけて他を嬉しがらせんと思ふならば少しも遊びの面白味あるまじ負けし人に本意なく思はせて自分の心を面白がらんとするは不道德なり。

仲よき朋互の人々戯れするに身を後にして、人を先にするにはしかず。よろずの遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらんためなり。己が藝の、まさりたる事を喜ぶ。されば、負けて興なく覺ゆべきこと、又、知られたり。われ負けて、人を喜ばしめんと思はゞ、更に、遊の興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰まんこと、德に背けり。

註解 ものに爭はずは、物事にさからはず。●わが身を後にしては、自己をあとまはにして、老子に「民に先だたんと欲せば、必ず身を以て之を後にせよ」とあり。●德に背けりは不道德との義。

も、計略にかけてだまし、自身の智のすぐれしを面白しとす。是も人のする事にあらず故に最初は酒宴如きより事起り、いつ迄も遺恨に思ひ合ふ類多し。これも皆物事を爭ふを好むに基づく過失なり。

人にすぐれたしと思はば學問して智にて勝つべく覺悟すべし。聖人の教を學びなば自分の善くする事を自慢せず、友にさからひては宜しからずと知るべき故なり。場合により高位高官を辭し、利益をもむつまじき中にたはぶるるも、人を謀り欺きて、おのれが智のまさりたることを興とす。これ又、禮にあらずは、人の長き恨を結ぶたぐひ多し。これ、皆、あらそひを好む失なり。

註解 戯るにもは、いたづらするにも。●禮にあらずは、人のする事ではないとの義。●興宴は、遊興の酒宴。●長き恨云云は、取り返しならぬ仲惡しくなるを云ふ。●失なりは、あやまちぞとの義。

人に勝らんことを思はゞ、學問して、その智を、人にまさらんと思ふべし。道を學ぶとならば、善

棄ててかへりみぬは、只々學問の造詣深きおかげなり。

●第百三十一段

貧者は何かに金錢を以て禮をつくすものとし、老者は強ひて力立をして禮をつくすものとす。自分の金力なり體力なりを測りて及ばずと知る時は直に止むるが智なり。そなにほこらず、輩に爭ふべからずといふことを知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨つるはただ、學問の力なり。

註解　伐るは、てらふ。じまんす。●大なる職は。高位高官。重大なる官職。

第百三十一段　貧しきものは

貧しきものは、財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて及ばざる時はすみやかにやむを智といふべし。許さざらんは、人のあやまりなり。分を知らずして、しひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくして、分を知

止むるを承知せぬ人あらば其人の誤りなり。無理になすは自分の誤りなり。貧者にして分を忘るれば盗みをし、力衰へて分を忘るれば病氣にかかる。

●第百三十二段

鳥羽新道は、鳥羽殿御建築後の名にあらず、古來の名なり元良親王が元日の奏賀の御聲いたくすぐれさせられ、大極殿より鳥羽新道まで聞えたる由、式部卿重明親王の御記錄らざれば盗み、力衰へて、分を知らざれば病を受く。

註解　貧しき云云は、曲禮に「貧者は貨財を以て禮させず、老者は筋力を以て禮せず」の語を取りて轉用せるもの。●分は、ほど。ぶんげん。

○第百三十二段　鳥羽のつくり道は

鳥羽のつくり道は、鳥羽殿建てられて後の名にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽のづくり道まで聞えける由、李部王の記に侍るとかや。

註解　つくり道は、新道。鳥羽は、山城國紀伊郡に屬す、京都

にありとぞ。

●第百三十三段

天皇の御寢所は、東御枕なり大抵は東方を枕とすれば陽氣を受くるが故に、孔子も東枕にして寢れられたり。寢殿の構造は時々或は南枕にするが

の南方。●鳥羽殿は、白河上皇の御所。應德三年に建てられたり。●元亨親王は、陽成天皇の第一皇子。●殊勝は、すぐるること。●奏賀は、大極殿にての朝拜に、群臣再拜のとき、奏賀・奏瑞とて、二人の者庭に進みて、去年のめでたき嘉瑞を奏すると云ふ。●大極殿は、古昔、八省院の中央にありて、天子朝政を聽き給ひし正殿。●李部王の記は、醍醐帝の皇子式部卿重明親王の御記錄。李部は、式部の唐名。

○第百三十三段　夜のおとどは

夜のおとどは、東御枕なり。おほかた、東を枕として、陽氣を受くべきが故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕、常の事なり。白河院は、北首に御寢なりけり。北は忌む事なり

普通なり。白河上皇は佛を信ぜられし故、釋迦涅槃の相をうちやみ北枕に御寢みになりしも、北枕は忌嫌ふ事なり。又南に方れり、太神宮の方へ御足をあつるは如何かと或人言ひたり。併し、伊勢の遙拜は東南の方位に向はせらる、南にはあらず。

●第百三十四段

高倉院の法華堂に法華三昧の僧、某律師或時鏡にて吾が顏を熟視し、非常に容貌の惡し

又、伊勢は南なり、大神宮の御方を、御あとにせさせ給ふこと、いかがと、人、申しけり。但し、大神宮の遙拜は、たつみに向はせ給ふ、南にはあらず。

註解　夜のおとどは、夜の御殿と書す、天皇の御寢所●。しつらひは、つくりもの。まうけ。●忌む事は、きらふこと。●御あとには、すそ方に、足の方に。●位。●たつみ（辰巳）は、東南の方

○第百三十四段　高倉院の法華堂の三昧僧

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時、鏡を取りて、顏を、つくづ

きに驚きはて、再び鏡を手にせざりき。又少しも人に會こともせざりき。只法華堂の御勤めの折にのみ出合ひ平生は引籠り居られしと聞けり。感心にも珍らしき事に思ひたり利口らしき人も、只人の事のみを測り自分の身の上の事をば知らず。自分を知らずして他を知るの理あるべき筈なし故に自分を知るをば物の道理を知れる人と云ふべし。容貌の悪しきを知らず、心の愚さては藝の拙なるも知らず、身

と見て、わが貌のみにくく、浅ましき心地しければ、その後、長く鏡を恐れて、手にだに取らず、更に、人に交ることなし。御堂のつとめばかりにあひて、こもりゐたりと、聞き侍りしこそ、ありがたく難くおぼえしか。

註解 高倉院の法華堂は、高倉天皇の御陵所、今は後清閑寺陵と申し、下京區の清閑寺町に屬す。●三昧僧は、法華三昧の會。三昧は、心思を一事に集注して動かす、心氣を靜寂にして亂さざること。●あひては、法華堂の勤行の時ばかり會して。●おぼえしかは、思ふたとの義。

かしこげなる人も、人の上をのみはかりて、おの

のつからぬをも、年よるのも病の來るのも、死の迫るをも修行の足らぬのも知らず、又自分の悪しきを知られば、尙しも他人の誹謗を知らず。併し、容貌は鏡にて見られ、年は數へて知らる。自分の事知らぬに非ざるも、如何ともしがたければ、知らぬに似しも云ひたし。悪しき容貌を善くし、年を若くすべしとには非ず、拙なるを知らば、何とて現在の地位より退かざるか。年よれりと悟らば、何と

れをば知らざるなり。われを知らずして、外を知るといふことわりあるべからず。されば、おのれを知るを、ものを知れる人といふべし。

註解 ことわり(理)は、物の道理。

かたち見にくけれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝のつたなきをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の犯すをも知らず、死の近きことをも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、ましてゆ、外のそしりを知らず。但し、かたちは鏡に見て、年は數へて知る。わが身のこと知らぬにはあ

て世を逃れて身を安樂なる地におかざるか。修行足らぬと知らば、何とて不足と云ふ事を知りて更に勉強せざるか。そうして、人に愛せられざるに、數多の人に交際するは恥辱なり。容貌惡しく心劣れるに職につき、智なきに大才能の人と交際し、未熟の藝なるに拘らす名手の人の座にならび、白髪の年して血氣壯んの人と共にし、まして出來ぬ事を希望し、出來ぬ事を憂慮し、來らざる事を待ち、人に恐れたり媚びたりするは、他人の與ふる恥にあらずして、貪慾の心にひかれて、自身に自身を恥しむるなり。貪慾飽くことを知らざるは、死と云ふ一大事が眼前に迫れりと、たしかに知らざるが爲なり。

らねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりともいはまし。貌を改め、よはひを若くせよとにはあらず、つたなきを知らば、何ぞ、やがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞ、靜に、身をやすくせざる。行おろかなりと知らば、何ぞ、これを思ふこと、これにあらざる。

註解 かたち見にくけれどもは、容貌は醜惡なれども。●至らざるは、つくさぬこと。●すべき方は、施す術。◎貌を改めは、みにくき容貌を美しく改めかへ。よはひは、年齢。とし

●これには、ここに。この事にの義。

すべて、人に愛樂せられずして、衆に交るは恥なり。貌みにくく、心おくれにして、出で仕へ、無智にして大才にまじはり、不堪の藝をもちて、堪能の座に列り、雪のかしらを戴きて、さかりなる人にならび、況んや、及ばざることを望み、かなはぬ事をうれへ、來らざる事を待ち、人におそれ人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心に引かれて、みづから、身を恥しむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事、今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

註解 愛樂は、人に愛せられすかること。●心おくれは、心の劣ること。●大才は、かしこき大人物。●不堪の藝は、み

じゆくのわざ。●堪能の席は、上手のゐならぶ席。●雪のかしらを戴きは、しらがあたまなして。さかりなる人は、壯者わかもの。●及ばざる云云は、出來ぬ事を希ふし。●命を終ふる大事は、死ぬると云ふ一大事。

●第百三十五段

資季大納言入道とか云はれたる人、具氏小納言中將と出會ひ「君が御問ひになる事は皆お答へして見やう」と云はれし故、具氏は「どうでありませう」と言はれたが「それでは問ひかけ給へ」と言はれて「氣の利きし事は存ぜぬ故、何となう埒もなき事につき、知らぬを御教へ願ひませう」との言に對して入道は「まして我國の淺薄なる事ならば、如何なる事にても明かに言ひ說かんと、言はれしが、近侍の人達は、一面白き爭論なりならば上皇の御前にてせられたし、負けたる人は陛下への御料理を調のへ給へ」と約束して、御前へお呼びになりしに、具氏は「うまのき云云」とは如何なる事か御聞かせ願ばし、幼少より聞々も其意味申すまでもなし。何となきそぞろごとの中に、おぼつかなき事こそ、問ひ奉らめ』と、申されけり『ましてあきらめ申さん』と、いはれければ、近習の人々女房どもも、『興あるあらがひなり。同じくは御前にて爭はるべし。負けたらん人は、供御をまうけらるべし』と、定めて、御前にて召合はせられたりけるに、具氏、『をさなくより聞き習ひ侍れど、その心知らぬこと侍り『うまのきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりくれんごう』と、申すことは、如何なる心にてか侍らん、承らん』

○第百三十五段　資季大納言入道

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、『わぬしの問はん程のこと、何ごとなりとも、答へ申さざらんや』と、いはれければ具氏、『いかが侍らん』と、申されけるを、『さらば、あらがひたまへ』と、いはれて、『はかくしき事は、かたはしもまねび知り侍らねば、尋ね

を知らず」と言はれしが、入道はッと返事につまり「これは埒もなき事ゆゑ、云ふ價値なし」と逃げられしを、一最初より深き學問上の事は知らず、我國の俗間の高尚ならぬ事、御尋れすべく御約束致したり」と云はれたるが、入道が負けとなり、約束の御馳走を嚴重にせられたりと云ふ。

と、申されけるに、大納言入道、はたとつまりて『これは、そぞろごとなれば、いふに足らず』と言はれけるを、『もとより、深き道は知り侍らずそぞろごとを、尋ね奉らんと、定め申しつ』と、申されければ、大納言入道、負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

註解 資李大納言入道は、藤原資李卿、のち出家して了心と號せり。●具氏宰相中將は、源具氏卿。宰相は、小納言の唐名。●わぬしは、おぬし。對稱の代名詞、又、おまへ。きさま。●あらがひ給へは、爭論し給へ、お問ひなされとの義。●はかゞしき事云云は、氣のきいた事は存ぜぬ故、とりとめもなき事の、わからぬ事をお尋ねせんとの義。●そぞろごと(漫言)は、よしなきこと。とりとめなき言。●こゝもとの淺きことばは、我國の俗間の高尚ならぬ事は。●あきらめは明かに言ひ說くこと。●興ある云云は、面白き爭論である。●御前は、上皇の御前。●供御云云は、負けた人は御馳走をなさるべしとの義。●うまのきつりや云云の句は、意義明かならず。或說には、馬の病氣のまじなひとも、雁の隱語とも云へど、たしかならず、具氏の口にまかせての言と見てもよかるべし。●所課は、まけた罰の馳走を云ふ。

●第百三十六段

醫師あつしげ、故化園上皇の御前に伺ひし時、御膳まゐりしに「只今まゐりたる御膳のかず〳〵、文字や功能お尋れ

○第百三十六段　醫師あつしげ

醫師あつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御のまゐりけるに、『今まゐり侍る供御のいろ〳〵を、文字も功能も、尋ね下されて、そらに申し侍

の上御答へせし事、本草綱目に御對照になれかし。一として申し誤りはござりません」と云ひし時、六條の故内府御參内ありて「有房も事のついでに、物教へていただかんがしほと云ふ文字は何偏なるかと申されたり。あつしげは「土偏でござります」と答へぬ。それで有房卿は、「才學の深き淺きは最早知れたり。もうそれだけにてよし、奥深き所なし」と申されしが、どツと大笑ひになり、あつしげは面目を失して退出せり。

●第百三十七段

花は滿開、月は照らさぬ所なき滿月のみに限るべきに非ず。雨の夜に月をしのび、引籠りて春の暮るるを知らぬも、一入風流に情趣深し。咲きそめし枝の花、落ちて萎れたる庭の眺めもおもしろみ多し。和

らば、本草に御覧じあはせられ侍れかし。ひとつも、申しあやまり侍らじ』と、申しける時しも、六條の故内府、まゐり給ひて、『有房、ついでにもの習ひ侍らん』とて、『まづ、しほといふ文字は、いづれの偏にか侍らん』と、問はれたりけるに、『土偏に候ふ』と、申したりければ、『才のほど、既にあらはれにけり。今は、さばかりに候へ、ゆかしきところなし』と、申されけるに、どよみになりて、罷出でにけり。

註解　故法皇は、故は、もと。御崩御になり花園院を云ふ。●供御は、法皇の御膳。●功能は、きめ。こうのう。●本草は、支那古代の植物學の書物。即ち、本草綱目。●六條の故内府は、内大臣源有房卿。書と和歌の名人。●しほは、鹽なり。正しくは鹵偏なるを、俗に塩と書くより、土偏なりと答へしなり。●さばりに候へは、もうそれだけにてよい。●どよみになりては、一座がどツと大笑ひになりて。

○第百三十七段　花はさかりに

花はさかりに、月はくまなきのみ見るものかは、雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌のことばがきにも、『花見にまかれける

歌の前書にも「花見ゆきけるに、もはやあらしたり」とも、「妨げられて行かず」など、書きたるは、「花を見て」と云ふに比して決して劣らず。花の散りうせ、月の西山にかくるるを惜しく思ふ習慣は、さもあるべき事ながら、わけて不風流なる人は「この枝もかの枝も花は散れり、もう見るに足らず」など言ふやうなり。世の萬事も、はじめと終りが面白し。男女間の戀愛も、ひたすら會ひし事のみ言ふものに、はやく散り過ぎにければ』とも、『さはることありてまからで』なども書けるは、『花を見て』と、いへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふならひは、さることなれど、ことにかたくなる人ぞ、『この枝、かの枝、散りにけり。今は、見どころなし』などはいふめる。

註解 月はくまなきのみ云云は、月の美は照らさぬ所なき滿月のみには限らぬとの義。●むかひては、雨に對して。●たれこめては、簾などをたれて一室に籠居すること。古今集の「たれこめて春の行方も知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」の歌は、此句の出處なり。●あはれになさけ深して、風流に情趣が多しとの義。●歌のことばかきは、歌のまへがきにあらず。會はずじまひになり辛きを思出、はかなき約束を恨みて永き此夜を明し、天涯に心をはせ、荒れし住居に過去の戀をおもふのこそ、色ずきと云ふべきものなり。

十五夜の月の輝きわたるを、千里のはてまで眺めたるよりも、待ち迎へたる夜明近き頃の月、何となく情深く、青みをおびて深山の杉の枝にかかりたる、木のまよりてらす月影、ときどき時雨はこぶ叢雲がくれのものも、更に面白しき。折りてふれてとか、友を懷ひてとかの類。●かたくなる人は、不風流なる人士。

萬のことも、はじめ終こそかしけれ。男女の情も、ひとへに相見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井をおもひやり、淺茅が宿に昔をしのぶこそ、色このむとはいはぬ。

註解 かしこければ、面白い。●憂さは、つらいこと。●あだなる契は、はかなき約束。●雲井は、そら。天涯。●かこちは、思ひわびてなげくこと。●淺茅が宿は、荒れはてたる家草生ひ茂れる住居。●しのぶは、思ふ。

望月のくまなきを、千里の外までながめたるより

椎の木のしげみ、白樫等のぬれたる如き葉の上に、きらきらと光りながす月、その眺め實に身にしみ、此おもむき解する風流の友居らばと、都なつかしく思はる。

そうして月や花なば、さやかに目のみにて見るものに非ず春はそこに遊ばずとも、月のある夜は寢床に臥しつつうち偲ぶこそ、頼母しく思はれて面白し。

上流の人は一途に好めるやうにも見えず、面白がるさまも心にとどめぬ風なり。片田舎の人はしつこく何事をも面白がるものなり。花見の折は其木の下にすり寄りたち、寄りわき目もふちず見つめて酒もりしつ連歌しつ、終には不風流にも大きやかなる枝を折り取り、清水には手や足をつけ雪降れる時分には、おりて其上に足形をつけなど、何から何まで、間接にながむる事なし。

かかる人々の賀茂の祭典見物する有様は、いたく珍妙なり

も、曉近くなりて、待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる、むら雲がくれの程、又なくあはれなり。椎柴しらがしなどの、ぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

註解　望月のくまなきをは、十五夜の月のすみからすみ迄照らすを。●千里の外は、月の明かにして、遠く見渡さるる形容。●うちしぐれは、さつと雨の降ること。●椎柴は、椎の木のむらがり生ずる所。●しらかし（白樫）は、殼斗科に屬する木

心あらん友は、風雅の友人。此趣味を解する友。

すべて、月花をば、さのみ、目にて見るものかは春は家を立ち去らでも、月の夜は、ねやの中ながらも、思へるこそ、いと頼母しうをかしけれ。

註解　さのみは、さうばかりの義。●思へるこそは、想像するのがとの義。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。片田舎の人こそ、色こく、萬はもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り、立ちより、あからめもせず守りて、酒飲み、連歌して、果は、大きなる枝、心なく折り取りぬ。泉には、

き。「見物遅し、來るまで棧敷用なし」と云ひ奥の座敷にて酒宴し物食ひ、ごうち、双六等にふけり、棧敷に留守番する人の「只今御渡なり」と知らすれば、何れも周章て棧敷にかけのぼり、落ちかかるまで簾を向ふの方にやりて首つき出し、一も見漏すまじと見つめ「何とか彼とか」評し合ひ通りすぐれば、又、御渡りのくる迄」と言ひておりる只々神事は度外におき練物のみ見んとするものなるべし。

京の上流社會の高尚なる人ば、ねねむりて練物はよくも見ず、年若きしもゝ〳〵の召使は、主人の用事に立ちつ居つし、人の後に供して居るものは、不行儀なるを知るが故にもたれかからず、また無理やりに見んとする人もなし。町々の家々に、何となう奏な諸道具にかけて、夜のあけきらぬ頃、靜かに棧敷へ寄する物見車なども奥床しきを、たれか彼れかと想像して居るまに、牛飼や下部などに見覺え手足さしひたして、雪には、おり立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見る事なし。

註解 よき人は、上流の人。人品高き人。●すけるさまは、好める風。●興ずる云云は、面白がる風もおほまかとの義。●色こくは、しつこく。●ねぢ寄りは、すり寄ること。●あらめ云云は、よそみもせずに見つむる。●よそながらは、打ちつけずに。間接にの義。

さやうの人の、祭見しさま、最珍かなりき。『見ごと、いと遲し。そのほどは、棧敷不用なり』と、奥なる屋にて、酒飲み、ものくひ、圍碁、雙六、などに遊びて、棧敷には、人を置きたれば、『渡り候ふ』と、いふ時におの〳〵、肝つぶるやうに、爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで、簾はり出でて、押しあひつつ、ひとことも見もらさじとまもりて、『とあり、かかり』と、物ごとに言ひて、渡り過ぎぬれば、『又、渡らんまで』と、いひて下りぬ。ただ、物をのみ、見んとするなるべし。

註解 祭見しさまは、賀茂の祭典を見た有様。●めづらかは、きめう。珍奇。●見ごとは、見物する事。●渡り候ふは、さあ、御渡りがまゐりましたと云ふこと。●肝つぶるるやうには びッくりして周章て。●簾ばり出では、棧敷へつるせる簾を

のものもあり。面白くもひんのよき人、美しき衣服つけたる人などの往來するを見るも決して退屈せず、暮近くなれば、立ち並べられし物見車、さては立錐の地なく並み居し人々も、何處へ歸りたるにやまもなく少なくなりて、車等の混雜もすめば、棧敷の簾や疊もとり去られ、眼前に淋しくかはりゆく、世の盛衰の事も思ひあたりて、あはれなり大通のやうす見るこそ、賀茂の祭典を拜觀せりと云ふ

向へつきだし。●さあり、かかりは、かうあつた、ごうあつた。●ただ、物をのみは、神と云ふ事は度外におき、練物はかりを。

都の人のゆゆしげなるは、睡りて、いとも見ず。若く末々なるは、宮づかへに立ちゐ、人の後に候ふは、樣惡しくも及びかからず、わりなく見んとする人もなし。

註解　都の人のゆゆしげは、京の上流社會の高尚なる心の人はと、ほめて言ひし語。●いともは、よく。●末々は、下の召使の人々。●宮づかへにたちゐは、主人の用事に立ちつ居つする。●及びかからずは、もたれかかりはせぬ。●わりなくは、無理に。

べきものなり。

彼の棧敷の前をば、ゆききする人の中に、見知りたるもの幾人もありしにより知られたるは、世界の人の數も、云ふ程にも多からぬ事なり。此人々のみな死せる後、自分が死すると定まり居るとしても、まもなく待ちあへて死するなるべし。

大なる器物に水を入れ、細き穴をあけたとせんに、もれ落つる事少なきにもせよ、もりて止む時なくは、終に盡きは何となく、葵かけわたして、なまめかしきに、明け離れぬ程、忍びて寄する車どもの床しきを、たれか、彼かなど、思ひ寄すれば、牛飼、下部などの見知れるもあり。をかしくも、きら〳〵しくもさま〴〵に行きかふ見るも徒然ならず。暮るる程には、立てならべつる車ども、所なく並みゐつる人も、いづ方へ行きつらん、程なく、稀になりて車どもの亂がはしさもすみたれば、簾、疊も、とり拂ひ、目の前に、さびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大路見たることこそ、祭見たるにてはあれ。

つべし。京中に居る數多の人死せざる日はなかるべく、一日に一人や二人にてはすむまじ。鳥部野、舟岡其他の墓地に送る葬式多き日はあれど、送らざる日とては無し。故に棺桶賣るものは、作りおきになる間もなし。年の若きにも身の達者なるにも拘らず、意外なるは死の來る事なり。今日まで死をまぬがれ來しは希有の不思議なり。暫時にても、此世を安樂にとは思うては居ら、ままこいしたて蠟子石立といふもの

註解　葬かけわたしては、賀茂の祭典には、二葉の葵を長くつられ、その前日より御簾、柱、諸道具に掛くること、各戸みな同じ、故に葵祭との名あるなり。●なまめかしは、りッば。優美。●それか、彼かは、其人か彼の人かとの義。●きら〳〵しくも云云は、美しい衣服の人、さては上品なる人、目さき變りて行き違ふを云ふ。●徒然ならずは、退屈せずとの義。●亂がはしさは、雜沓すること。こんざつ。●世のためし云云は、此世の榮枯盛衰の事も心に當る。●大路見たるこそは、こんな大通りの樣子を見物してこそ。

かの棧敷の前を、ここら行きかふ人の、見知れるが、あまたあるにて知りぬ。世の人數も、さのみはなからぬにこそ。この人、みな、うせなん後、

た、双六の石にてつくり、石を並べて居る中は取らるるほどの石とも知りがたけれど、數へあてて一つを取れば、其外は一時のがれしとも見えながら、又かぞふれば彼是とぬき取るまに、盡く取られ仕舞ふ。これと同じく、人の死もいつかは身の上にめぐり來る兵士の出陣するは、死に迫る事を知りて、家をも身をも忘る。世すて人の草庵には、心靜かに山水竹石を愛しみて、此出陣と無關係と思ふのはわが身死ぬべきに定りたるも、ほどなく待ちつけぬべし。

註解　さのみは、そんなに。それ程。●みなうせん後は、皆死にうせてのち。

大きなる器に、水を入れて、細き穴をあけたらんに、滴ること少しといふとも、怠る間なく漏り行かば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に、一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば、棺をひさぐもの、作りてうち置く程なし。若きにも

つまらぬ事なり。靜けき山の奥に住む世棄人も、無常と云ふ事がおしかけて來ぬわけはなし。その死に近ける事は、戰場に臨めるものにすこしもかはらず。

よらず。強きにもよらず、思ひがけぬは死期なりけふまで遁れにけるは、有難き不思議なり。しばしも、世をのどかには思ひなんや。まま子だてといふものを、雙六の石にてつくりて、立て並べたるほどは、取られん事、いづれの石とも知らねども、數へあてて、一つを取りぬれば、その外は、のがれぬと見れど、また數ふれば、かれこれ、まぬき行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の、軍に出づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに、水石をもてあそびて、これをよそに聞く

と思へる、いとはかなし。靜なる山の奥、無常のかたき、きほひ來らざらんや。その死に臨めると、軍の陣にすすめるに同じ。

註解　鳥部野は舟岡と共に京都市外の墓地。●さらぬは、鳥部野や舟岡以外のその義。●ままこ立ては、黑と白との石を各々十五個都合三十個並べて、十二に當る石を取る遊び。●水石をもてあそぶは、世を避けて山水の景色に親しむる云ふ。●これをよそには、兵の軍に出づるを知らぬ顏にの義。●無常のかたき云云は、世のはかなき事が押寄せて來ては居らぬ死に近づいて居るのは、出征の兵も山中に隱れて居る人も同じとの義。

○第百三十八段　祭過ぎぬれば

賀茂の祭典すぐれば、つかひし葵用なしとて、或人の御簾にかけしを取除けさせられしが、興さめし事と思ひしを、高貴の方の事故、然かするものかと思ひしものの、周防内侍が「かくれども」と詠みたるも、本家の御簾に葵が枯葉になりかかれるを見て詠める旨、その和歌集に書けり。古歌の前書に「葵にさしてつかはしける」とあり。枕草紙にも「こしかた戀しきもの、かれたる葵」と書けりも、深く

祭過ぎぬれば、葵不用なりとて、ある人の、御簾なるを、皆、とらせ侍りしが、色もなくおぼえ侍りしを、よき人の、し給ふことなれば、さるべきにやとは思ひしかども、周防内侍が、

かくれどもかひなきものはもろ共に
みすのあふひのかれ葉なりけり

とよめるも、母屋の御簾に、葵のかかりたる枯葉をよめるよし、家集に書けり。古き歌のことばがきに書かれたる、『葵にさしてつかはしける』とも侍り。枕草紙にも、『こし方戀しきもの、かれたる葵』と、書けるこそ、いみじくなつかしう思

墓はしき思ひつきなり。長明が四季物語にも「玉だれに後の葵はとまりけり」とぞ書きあり。自然と枯れたのさへあはれなるに、況して跡形もなく取除けてよかるべき。

御戸ばりに掛れる藥玉も九月九日に菊ととり代へらるると云ふ故、菖蒲の藥玉は、九日の菊の節句まで有る筈なり。

枇杷太后宮崩御後、古き御戸ばりの中に、菖蒲藥玉などの枯れしがありしを見て「折なちぬ」と辨乳母の云ひし返事に、鴨長明が四季物語にも、『玉だれに、後の葵はとまりけり』とぞ書ける。おのれとかるるだにこそあるを、名殘なく、いかが取り捨つべき。

御帳にかかれる藥玉も、九月九日、菊にとりかへらるるといへば、菖蒲は、菊の折までであるべきこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳の中に、菖蒲藥玉などの、かれたるが侍りけるを見て、『折ならぬ根をなほぞかけつる』と、辨の乳母のいへる返事に、『あやめの草はありながら』とも、江の侍從がよみしぞかし。

に「あやめの草はありながら」
と、江の侍從は詠みたり。

註解 色もなくは、風情なく、趣味なく。◉よき人は、上流の人。高貴の人。●周防内侍は、周防守平繼仲の女、名は仲子。後冷泉天皇の女房とも云ひ、白河天皇の内侍とも云ふ二說あり。●かくれどもの和歌の意は、優美なる御簾にかけし葵の枯葉も思ふ、人と共に見るならば兎も角も、諸共に見ぬから興なしとの義。みすは、みすにかけて言ひしもの。●母。屋は、おもや。本家。●家集は、一人の述作の歌を集めしもの。此にては周防内侍の和歌集。●鴨長明は、賀茂の社家、後鳥羽上皇の時代、和歌所の寄人。●御帳は、御とばり。●藥玉は、種々の香料を入れたる袋を集めて玉となし、造花などを用ゐてこれを裝飾し、其下に五色の絲を七八尺ばかり垂れたるもの。昔時、これを簾又は柱などにかけて、不淨を

●第百三十九段
家の庭に植ゑておきたき樹木は松、さくら。松は五葉もよし。櫻の花は一重なるもよし八重櫻は奈良の都のみにありしを、方今は到る處にあり。吉野の花、左近の櫻などみな一重なり。八重櫻はかはりたる體のもの也。大にしつこく清楚なるおもむきを缺けり。

拂ひ臭氣を避くる具となせり。續命縷。◉枇杷皇太后宮は、三條天皇の后、藤原道長の二女、研子。●辨のめのとは、辨の乳母。前加賀守顯時の女。●江の侍從は、大江匡衡の女。

○第百三十九段　家にありたき木は

家にありたき木は、松、櫻。松は五葉もよし。花は一重なるよし。八重櫻は、奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ、世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、みな、一重にてこそあれ。八重櫻は、ことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなん。おそ櫻、またすさまじ。蟲のつきたるもの、むづかし。梅は白き、う

かかる物は植ゑずとも可なり遅咲の櫻も亦おもしろみに乏し。毛蟲のつきたるもの、嫌惡すべし。白梅や淡紅梅の一重のもの早く咲けるも、八重の紅梅の香氣よきもの、皆賞するに足る。おそ咲の梅は櫻と同じ時に咲きあひ、愛くだり、壓倒せられて、その花の枝にしぼみつける厭はし、「單瓣のもの早くさきて散れる氣の利きし樣にて面白し」と云ひ、京極入道はやはり單瓣の梅を軒近う植ゑたまへり。

す紅梅、一重なるがとく咲きたるも、重りたる紅梅のにほひめでたきも、皆をかし。おそき梅は、櫻に咲きあひて、おぼえ劣り、けおされて、枝にしぼみつきたる、心うし。『一重なるが、まづ咲きて散りたるは、心とく、をかし』とて、京極入道中納言は、なほ、一重梅をなん、軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳、またをかし。卯月ばかりのわか楓、すべて、よろづの花紅葉にもまさりて、めでたきものなり。橘、桂、いづれも、木はものふり、大きなるよし。

京極殿の家の南向の所に、今に至るも二本の梅樹存す。抑もまた面白し。四月頃の若楓さまざまの花や紅葉にも立ちすぐれて愛すべきものぞかし。橘、桂、ともに古木にて大きやかなるがよろし。

草は山吹云云、譯の要なき故省く。

以上の外、世に珍らしき物、支那風の名聞きぐるしく、花に於ても見馴れぬもの深く慕はしからず。すべて何にても珍しく少なき物は、下品な草は山吹、藤、かきつばた、なでしこ。池には蓮秋の草は荻、薄、桔梗、萩、女郎花、ふぢばかま紫菀、われもかう、苅萱、りんだう、菊、黄菊も蔦、葛、朝顔、いづれも、いと高からず、ささやかなるが、垣に繁からぬ、よし。

この外、世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。おほかた、何も、めづらしく、あり難きものは、よからぬ人の、もて興ずるものなり。さやうのものなくてありなん。

註解　左近の櫻は、紫宸殿の南庭に右近の橘と相並びて有名

ゐ人の喜ぶものなり。かかるものは、有らずともよかるべし。

●第百四十段

自分の死後に財貨殘る事は、智者のなさぬ所也。善くなきなり。●ことやう(異樣)は、かはりたる體。ことざま。●こちたくは、くどく。ひつこく。●またすさまじは、おそ櫻も亦面白くなしとの義。●むづかしは、いとはし。嫌惡すべし●おぼえは、めづること。あい(愛)。●けおされては、壓倒されて。●まづ咲きては、早く咲きて。●心さくなかしは、氣早でよしとの義。●京極入道中納言は、定家卿のこと。●ふぢばかま(藤袴)は、菊科に屬する草。●りんだう(龍膽)は龍膽科に屬する草の名。たつのいくさ。●おほかた、何もは概してすべての物が。●よからぬ人。下品なる人物。

○第百四十段　身死して

身死して、財殘るは、智者のせざるところなり。よからぬ物蓄へ置きたるもつたなく、よきものは物貯へおくも見さげられ、善きもの大切になしけんと思はれてつまらぬ。こて〳〵と多きは、一入遺憾なり。「われこそ得べし」など云ふ人々ありて、形見爭ひたるは、外聞惡し。若し死後遺贈したき物あらば、生存中に與ふべし。朝夕の日用品は仕方なきも、それ以外の品物は、所持せずに居たきものぞ。

●第百四十一段

悲田院の堯蓮上人は、もとは三浦某と云ふ無双の武士なり心をとめけんと、はかなし。こちたく多かる、まして口惜し。『われこそ得め』など、いふものどもありて、あとに爭ひたる、さま惡し。後は誰にと志すものあらば、生けらん中にぞ讓るべき。朝夕なくてかなはざらんものこそあらめ、その外は何も、もたでぞあらまほしき。

註解　●つたなしは、拙なり。まづい。●はかなしは、つまらぬ。

○第百四十一段　悲田院の堯蓮上人

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。古里の人の來りて、物語

き。古郷の人來りての談話に「東國人は一旦言ひし事は力とせらる。京都の人は、承知のみして實なし」と言ひしに上人は「其事はさやうに思はるべきも、自分は京に永住し親しく見るに、人情薄しとは思はれず。そうして心やさしく情あるにより、人に言ひかけられし事、斷然ことわりかれ、何事も言ひきらず、心よくも承知す、虚言すべく思はざるも、貧乏にて方に適はぬ人多き故、自然に思ひにまかせぬ事も多からん。東國人は自分の國の方なれど、其實は愛嬌なく人情もうすく、只々剛直の氣質なれば、身に及ばぬ事は最初より否と言うてのく。生計も豊かなる故、頼まれし事を承知すれば實行する也」と、事をわけて話されたり。此上人、言葉も東國なまりにてあら〳〵しく、佛教の些細の理窟は知るまじと思ひたるに、今の物語聞きしより、急に墓はしくなり、僧侶多き中に一寺の住持となるすとて、『あづまびとこそ、いひつることは、たのまるれ。都の人は、ことうけのみよくて、實なし』と、いひしを、ひじり、『それは、さこそおぼすらめど、おのれは、都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心、劣れりとは思ひ侍らず。なべて、心やはらかにして、情ある故に、人のいふ程のこと、けやけくいなみ難く、よろづえいひ放たず、心よわく、ことうけしつ。偽せんとは思はねど、ともしくかなはぬ人のみなれば、おのづから、本意通らぬこと多かるべし。あづま人は、わが方なれど、げには、心の色なく、情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめより、否といひて止みぬ。にぎはひゆたかなれば、人には頼まるるぞかし』と、ことわられ侍りしこそ、このひじり、聲うちゆがみ、荒々しくて、聖教の細やかなる理、いと辨へずやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かる中に寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたるところありて、その益もあるにこそと、おぼえ侍りし。

註解 悲田院は、古昔、官より病人又は棄兒などを救ふに設けられし所、當時は鴨川附近にありしと云ふ。●堯蓮上人の傳不詳。●さうなきは、無雙なること。●たのまるれは、たよ

るは、斯く温和なる心あり、そのためなるべしと思はれたり。

●第百四十二段

情なしと見ゆるものも、善き一言は云ふなり。或東夷の恐ろしき風の者そばに居りしが「御子様はござりまするか」と問ひたるに、「一人も持ちませんし」と答へしが、「そんなら、人情と云ふ事はお知りになるまじ。何事も頑固一遍にあらせらるべし、大に恐ろし。子ありてはじめて、さまざまの情愛を知り得べし」と言ひたるは、實に當然なり。子に對する恩愛の道にあられば、かかる東夷の心になさけあるべきや。親に孝行心なき者も、子持ちてはじめて親の恩義なり情愛が知らるべし。世棄人の何一つ所有せぬ獨身者が、すべて妻子等の手足纏りになる。あてになる。●ことうけは、言承と書す。こたへ。へんじ。承け合ふ返事。●けやけくは、はツきり。きはだちて。●いなみ(辭)は、ことわること。謝絶。●ともしくては貧乏で。●げには、實は。●心の色は、あいそ。あいきやう。●情おくれは、人情の劣れること。●にぎはひゆたかはくらしむき十分に財産多きこと。●聖教は、佛教、佛道。●心にくく。奥床しくなまること。

○第百四十二段　心なしと見ゆるものも

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなりあるあらえびすのおそろしげなるが、かたへにあひて、『御子はおはすや』と、問ひしに、『一人ももち侍らず』と、答へしかば、『さては、ものの

のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞ。ものし給ふらんと、いとおそろし。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ』と、言ひたりし然もありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かかる者の心に、慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子もちてこそ、親の恩は、思ひ知らるれ。

註解　心なしは、人情なし。●あらえびすは、關東の荒々しき夷の義。東夷。●かたへにあひては、傍の人に向うて。●ものけ。ののあはれは、人情。なさけ。●恩愛は、こまやかなる世を棄てたる人の、よろづにするすみなるが、な

ひ多き人の、何かにつけて人に媚び、希望深きを見、非常に見下ぐるは不道理なり。其人の心にもならば、實に悲しかるべし。親や妻子の爲には貧苦に迫る故に恥辱をも忘れ盗みをもするものなり。盗をいましめ悪事のみを罰するよりも、世人がかつゑず、凍えぬやうに、天下の政事を施したきものなり。人に恒産なき時は恒心なし。人は貧窮して盗す。世の治まらずして、飢凍に苦しむものあらば、罪べて、ほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくだすは、ひが事なりその人の心になりて思へば、まことに悲しからん親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗をもしつべき事なり。されば、盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、人の飢ゑず、寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人、恒の産なきときは、恒の心なし。人きはまりて盗す、世治らずして、凍餒のくるしみあらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦め、法を犯さしめて、それをつみなはんこと、不便のわざなり。さて、いかがして、人は常にいづべし。人を飢凍に泣かしめ、法律を犯さしめそれを處刑するは、むごき事なり。さて、どうして人に恩惠を施すべきぞとならば、上に立づ人の驕奢をやめ、人民を愛撫し、農事を奬勵すれば下に利益ある事疑ひなし。衣食普通なる上に、不道理の事する人こそ、眞の盗賊と云ふべし。

●第百四十三段

人をめぐむべきとならば、上の奢り費すところをやめ、民を撫で、農をすすめば、下に利あらんこと、疑あるべからず。衣食、よの常なる上に、僻事せん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

註解 ○するすみは、匹如身の字を用ふ。少しの資産もなきこと。無一物。●ほだし(絆)は、手あしまとひ。自由を束縛する物事。●恒の産は、一定の生業。孟子に曰く、「民の若きは則ち恒の産なし、因りて恒の心なし云云」と見ゆ。●つみなはんとは、刑罰に處せんと。●よの常は、ふつう。尋常。●僻事は、不道理の事又は悪事。●人きはまりて盗すは、人は貧窮のあまりに盗賊をするとの義。

○第百四十三段　人の終焉のありさまの

人のいまはのさま、奇妙なりし事など人の話すを聞くに、只靜かにして本心を亂さざりさへ言へば奥床しきなれば、愚者は奇怪の相ありし等と言ひ自身のすきの方へこじつけほむるのは、其人平生の本心にもなき事かと思はる。死の大事は、權化の人も博學の人も推量すること能はず。自身にその本心にさへ背かずば、人の見聞の如何に關するものにあらず。

人の終焉のありさまの、いみじかりしことなど、人の語るを聞くに、たゞ靜かにして亂れずといはゞ、心にくかるべきを、おろかなる人は、あやしく、異なる相を語りつけ、言ひしことばも、ふるまひも、おのれが好む方にほめなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやと、おぼゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の人もはかるべからず。おのれ違ふところなくは、人の見聞くにはよるべからず。

註解 人の終焉は、人の死にぎは。●あやしく、異なる相は、不思議なる有樣。●權化の人は、神佛などが、かりに姿をか

●第百四十四段

栂尾の明惠上人が、御通行の時、河の中にて馬洗ひ居る男「あし〳〵」と言ひしに、上人立ちとどまり「ああ尊し宿執開發の人哉、阿字〳〵と唱ふるぞや。何人の御馬ぞ、非常に尊く思はるる也」とお尋ねありしに、「府生殿の御馬でござります」と答へたり「これはふき事聞きぬ。阿字へて人となりしもの。●おのれ違ふところなくは、自身の心にさへ背き違ふことなかつたならば。

○第百四十四段　栂尾の上人

栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、『あしあし』と、言ひければ、上人、立ちどまりて、『あな、たふとや、宿執開發の人かな、阿字〳〵と唱ふるぞや、いかなる人の御馬ぞ、あまりに尊くおぼゆるは』と、尋ね給ひければ、『府生殿の御馬に候ふ』と、答へけり。『こは、めでたき事かな、阿字本不生にこそあなれ、うれしき結縁をもしつるかな』とて、感涙をのごはれけ

本不生なのなり、喜ぶべき結縁したるもの哉」と感心のあまりに涙を流されたり。

●第百四十五段

るとぞ。

註解 栂尾は、高尾、槇尾と共に紅葉の名所、京都の西北三里餘の地。上人は、釋高辨即ち明慧上人のこと。栂尾高山寺の住持。●宿執開發は、宿執は過去の善、開發は現在の德。●阿字は、梵語の第一の字母、故にさま〳〵の意義を附して尊ぶ、眞言宗にて殊に甚し。前世の功德が今の世に現れて阿字〳〵と唱へて居るとの義。●府生は、六衛府及び檢非違使等の下官。六衛府は、左右の近衛府・兵衛府・衛門府の稱なり。●阿字本不生は、大日經に「阿字門一切諸法本不生」と見ゆ。前にはあし〳〵を阿字〳〵と聞き誤り、今また府生を不生と誤られしなり。●結緣は、佛道に緣を結ぶこと。

○第百四十五段　御隨身秦重躬

御隨身の秦重躬、院の御所の武士下野入道をは落馬して死する相あり、用心したまへと言ひしを、眞實とも思ひ居らざりしに、入道馬より落ちて死したり。人相見る術に達したる人の一言、あたること神の如し、と人々思ひたり。さて、如何なる相かと人の尋れに答ふるには「極めて桃尻なるが上に、善く勇み走る馬をすかれし故、落馬の相をあてたり。いつも此調子にて、言ひ誤りたることなし」との言

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、落馬の相ある人なり。よくつつしみ給へと言ひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願、馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言、神の如しと、人、思へり。さて、いかなる相ぞと、人の問ひければ、『きはめて桃じりにて、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申しあやまりたる』とぞ、言ひける。

註解 御隨身は、御は敬語、隨身は、弓箭を持ち帶劍して供奉する近衛の舍人。●相は、にんさう。●道に長じぬるは、人相見る術に達者なる。●桃尻は、鞍の上に落ちつかぬ尻。●

を以てしたり。

●第百四十六段

明雲座主、人相見に御面會になり「おのれに、若し劍難の相はありはせぬか」と問はせられしが、人相見は「げに其御人相あり」と申せり。「いかなる相か」と再び尋ねられしに、「弓箭刀劍などの御難の恐れあるまじき御身分にして、假初にも御心づきて問ひ給ふが既に其御難の前兆なり」と申せは、課すること。あつること。

○第百四十六段　明雲座主

明雲座主、相者とあひ給ひて、『おのれ、もし、兵仗の難やある』と、たづね給ひければ、相人『まことに、その相おはします』と申す。『いかなる相ぞ』と、尋ね給ひければ、『傷害のおそれおはすまじき御身にて、かりにも、斯くおぼしよりて、たづね給ふ。これ、既に、そのあやぶみのきざしなり』と、申しけり。果して、矢にあたりて、うせ給ひにけり。

沛芝の馬は、あらうま。はねうま。善く勇み走る馬。●おほ

したり。案の如く、矢に中りて死に給へり。

●第百四十七段

やいとの痕多くなれば、神事にけがれありとの事は、近世の人の言出せるにて、格式等の書には見えずと云ふ。

●第百四十八段

四十歳を越えし人、三里に灸すゑれば、狂人となると云ふ

註解　明雲座主は、座主は叡山延暦寺の貫主。●相者は、人相見。●兵仗の難は、武器にて害さるる災難。●あやぶみのきざしは、危險の前兆。●うせ(失)は、死ぬること。

○第百四十七段　灸治

灸治、あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふこと、近くの人の言ひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。

註解　灸治は、やいとにての療治。●格式は、のり、きそく。

○第百四十八段　四十以後の人

四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかざれば、上氣のことあり。必ず灸すべし。

諺あり。是非すうるべし。

●第百四十九段

鹿の袋角をにほふべからず、小蟲居りて鼻の穴より入り、腦を食うと言ひなせり。

●第百五十段

藝能を身に覺えんとする者、その藝能に熟練せぬ内は、なまなかに人に知られじ。内々下稽古をしてのち、人中へでなば、一入奥床しからんと平

註解 三里は、灸點の名、膝頭の下の外側のくぼき處。●上氣は、發狂すること。

○第百四十九段　鹿茸を鼻に

鹿茸を鼻にあてて臭ぐべからず、小さき蟲ありて鼻より入りて、腦を食むと、いへり。

註解 鹿茸は、鹿のふくろ角。つの落ちて新に生えし柔き角。

○第百五十段　能をつかんとする人

能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに、人に知られじ。うち〳〵、よく習ひ得て、さし出でたらんこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かく言ふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ、堅固、かたほなるより、上手の中にまじりて、そしり笑はるるにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性、その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、遂に、上手の位に至り、徳たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり天下のものの上手といへども、はじめは、不堪のきこえもあり、むげの瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くして、放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となることは諸道、かはるべからず。

生言へども、斯る人は、一藝も身に覺えし事なし。まだ藝の固く未熟の頃より上手の仲間に立ちまじり笑はるをも厭はで、しぶとく此處なる難所を通過して心がくる人、たとへ天性非藝に器用でなくとも根づよく年月たたば、上手にして藝をつつしまぬ人よりもゆくゆくは上手の地を占め、徳にも長じ、人にも尊重され第一との評判を取り得べし。天下第一の上手といへども、最初は不器用なりとの噂もあ

り、意外の缺點もありたり。しかし、其人道の規則を正しく守り、之をおもんじておろそかにせざる時は、斯道の達人にて數多の人の師匠となること、何れの藝道にても決して異なる所なし。

●第百五十一段

或人の言ふには、五十歳に至

註解　能なつかんとは、藝能を身につけんと。●なまじひには、心に副はぬに無理に。なまなかに。●うち〳〵（内内）よく習ひ得ては、ない〳〵下稽古をなして。●さし出でたらんこそは、人中に出づるのがとの義。●未だ堅固云云は、まだ藝が固く未熟なる頃より。かたほは、片偏の字を用ふ。●つれなくは、心づよくしぶとく。●天性その骨云云は、生れつき藝につきての器用はなきも。●堪能の云云は、上手で藝をつつしまぬ者よりも。●不堪のきこえは、不器用なりとの評判。●むげの瑕瑾は、殊の外なる申し分、意外のきず。●放埒せざればは、おろそかにせぬときには。

○第百五十一段　ある人のいはく

ある人のいはく、年五十になるまで、上手に到ら

るまで上達せざる藝は、なげ棄つべきなり。年よりたれば精出す前途もあらず。老人の事は拙なりとも人は笑はず。衆人にまじり居るは、愛嬌なく見苦し。世の老人はかれこれの事をやめ、閑暇にて居るが見苦しからぬ故、さうありたし。世事に手を出し、一生をあくせくと送るは、極めての愚者なり。墓はしく習はんと思ふ事は、たとひ學び聞くとも、その物事の感興を知らば、大略の程度にてやむべし

ざらん、藝をば棄つべきなり。剛み習ふべき行末もなし。老人のことをば、人も、え笑はず。衆にまじはりたるも、あいなく見苦し。萬のしわざはやめて、いとまあるこそ、めやすく、あらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯をくらすは、下愚の人なり。ゆかしくおぼえんことは、學び聞くとも、その趣を知りなば、覺束なからずして止むべし。もとより、望むことなくしてやまんは、第一のことなり。

註解　あいなくは、かはゆげなくと云ふ程の義。●めやすく。見やすく。見苦しくなく。●その趣は、個中の消息。その物

云ふ迄もなく、かかる希望を懐かずしてすまば、何よりも第一の結構なり。

●第百五十二段

西大寺の靜然上人、腰まがり眉白く、如何にも德に長ぜるさまにて、宮中にまゐられしに、西園寺内大臣殿、「ああ尊きさまかな」と信仰の念を起されし樣子なりし故、資朝卿は「年老いし也」と申されたり。其後むく犬の驚く程にやせ衰へ、骨だち毛はげしを人にひかせて「このさま、尊く見えます」とて、内大臣殿へ奉られしと云ふ。

●第百五十三段

爲兼大納言入道捕へられ武士等が護衛して六波羅へつれゆきしが、資朝卿、一條邊にてあひ、「ああ羨ましし、人と生れしかひには、斯うありたきも

事の眞味又は感興。●覺束云云は、大體を合點せば止むべしとの義。

○第百五十二段　西大寺の靜然上人

西大寺の靜然上人、腰かがまり、眉白く、まことに德たけたる有樣にて、内裏へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿、『あな、たふとのけしきや』とて、信仰の氣色ありければ、資朝卿、これを見て、『年の寄りたるに候ふ』と、申されけり。後日に、むく犬の、あさましく老いさらばひて、毛はげたるを引かせて、『このけしき、たふとく見え候ふ』とて、内府へ參らせたりけるとぞ。

註解　西大寺は、南都七大寺の一、大和國生駒郡伏見村大字西大寺に在り。●西園寺内大臣は、正二位實衡公。●資朝卿は南朝の忠臣藤原資朝卿、正中二年五月、北條氏の爲に佐渡に流され、のち斬首され給ひぬ。●あさましく云云は、驚くばかり痩せ衰へ骨立ち毛はげたるを人に引かせやつて。●このけしき云云は、前に「あなたふとのけしきや」と申されしに對し、諷刺せるの語。

○第百五十三段　爲兼大納言入道

爲兼大納言入道、召しとられて、武士どもうち圍みて、六波羅へゐて行きければ、資朝卿、一條わたりにて、これを見て、『あなうらやまし、世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ』とぞ、

のなり」と言はれたる由。

●第百五十四段

この資朝卿が、東寺の門に雨よけせられたる折、さまざまの不具者あつまり居しが、何れも他に見がたき變りものなり。いたく愛づべきものと熟

言はれける。

註解　爲兼大納言入道は、藤原爲兼卿、北條氏を滅さんとして謀漏れ、佐渡へ流され給ひき。事は承久二年六月なり。●六波羅は、北條氏が京都へ置きたる政務所。●あなうらやましし一句は、忠義を盡すこと爲兼の如くありたしと羨まれしなり。

○第百五十四段　この人

この人、東寺の門に雨やどりせられたりけるに、かたはものども集りゐたるが、手も足も、ねぢけゆがみ、うちかへりて、いづくも不具に異樣なるを見て、とりぐに類なきくせものなり。最も愛

視されたるが、すぐに其面白味つきはて、見にくくむさくるしく思はれしゆゑ、物はやはり只すなほに珍奇ならぬものに及ぶものなしとて、日頃好みて求められし曲折ある植木に對しても、彼のかたはを愛するに同じとて聊かの趣味感ぜぬやうにならせられ、鉢の植木をみな掘り棄てられたり。まことに、然かあるべき筈の事なり。

するに足れりと思ひて、まもり給ひける程に、やがて、その興盡きて、見にくく、いぶせくおぼえければ、ただ、すなほに、珍しからぬ物には如かずと思ひて、歸りて後、この間、植木を好みて、ことやうに曲折あるを求めて、目をよろこばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢に植ゑられける木ども、みな、掘り棄てられにけり。さもありぬべき事なり。

註解　この人は、資朝卿をさす。●東寺は、京都驛の西南に在り、一に教王護國寺と號す。眞言宗の總本山。延曆十五年桓武天皇東鴻臚を捨てて東寺とし、西鴻臚を捨てて西寺

●第百五十五段

世間の物事に當る人は、第一に機會を知るを要するなり。都合あしき事は他人の耳にも逆ひ、心にも違ひて其事成就せず、かう云ふ場合をよく注意せざるべからず。併し、病氣と出産と死とは、機會を

さし給へり。鴻臚は、鴻臚館の略にして、外國の來賓を接待する爲め、京都に設けられし第館。●かたはものは、不具者の義。●まもりは、見つむること。●いぶせくは、見苦しくきたなく。

○第百五十五段　世に從はん人は

世に從はん人は、まづ機嫌を知るべし。ついで惡しき事は、人の耳にもさかひ、心にもたがひて、その事ならず。さやうの折ふしを、心得べきなり但し、病を受け、子産み、死ぬることのみ、機嫌をはからず、ついであしとて、やむ事なし。生住

知り難き故に、都合あしとて止むる事を得ざるなり。生まるると此世に生存して老人になると病氣にかかると死するとの移りかはる眞の大事は、急流の奔騰するに似て、暫時もとどまらず、ただちに實地に見る。故に僧侶にても俗人にても、是非とも成就し遂げんと欲する事は、機會を論ずべからず、世間の事に心をつかふべからず、何等の用意もなく、俗事に足をとどめずに早く大事の覺悟をせざるべか

異滅のうつりかはるまことの大事は、たけき河の漲り流るるが如し。しばしも滯らず、ただちに行ひゆくものなり。されば、眞俗につけて、必ず果し遂げんと思はんことは、機嫌をいふべからず、とかくの用意なく、足を蹈みとどむまじきなり。

註解　機嫌は、見はからふべき時機。きくわい。●ついで惡しきは、都合又は折わるき等の意。●その事ならずは、其物事が成就せぬ。●生住異滅のうつりかはるは、出生すると、此世に住して老人となると、病氣に罹りて異形になると、死亡するとの移りかはり。●たけき河は、急流の河。●眞俗は僧侶と俗人との義。

ちず。

春くれて夏になり、夏終りて秋の來るにあらず。春の時節は最早夏の氣色を催し、夏時分より既に早く秋の氣色かよひ、秋に入れば寒し。十月は小春日和、草も青み梅もふくらみ、木葉おつるも先づ落ち芽ぐむに非ず、下より發芽に催されて落つるなり。迎ふ時氣の次に出來たるが故に、待ち取る順序極めて早し。生るると老いると病むと死ぬるとの四相の移りかはるは四季の

春くれて後、夏になり、夏はてて秋の來るにはあらず。春は、やがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅つぼみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萠しつるに耐へずして落つるなり。迎ふる氣、下にまうけたる故に、待ちとるついで、甚だ早し。

註解 小春は、陰曆十月の異稱。荆楚歲時記に曰く、「十月天氣和暖似レ春、故曰二小春一」と見ゆ。

生老病死のうつり來ること、また、これに過ぎたり。四季は、なほ、定れるついであり、死期は、それより一入速かなり。四季には一定の順序あるも、死期は順序を待たず。死は前より來で、もはや既に後に近つけり。人みな死あるを知り乍ら、早く來るものにあらずと思ふ中に急に來る。遠き沖つ方は干潟なるのに、意外なる方の磯曲より潮のみちくるに同じきなり。

●第百五十六段

大臣になりし披露の宴は然るべき場所を拜借してする事は普通なり。宇治大臣殿は、東

ついでを待たず。死は、前よりしも來らず、かねて後にせまれり。人みな、死あることを知りて、まつこと、しかも急ならざるに、おぼえずして來る。沖の干潟はるかなれども、磯より潮のみつるが如し。

註解 生老病死は、生るると、老ゆると、病むと、死ぬるとの四相。●これに過ぎたりは、四季のうつるよりも一しほ早いとの義。

○第百五十六段　大臣の大饗

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治大臣殿は、東三條殿にて行はる

三條院にて行はれたり。此院御所なりしを願はれしにより陛下はその時他所へ行幸遊ばされたり。これと云ふ外戚關係かなくても、女院の御所などを拜借すると云ふ事は、古來の事例なり。

●第百五十七段

筆手にすれば自づと物書かれ樂器手にすれば自づと音を出さんと思ふ。盃は酒を思ひ、賽は双六打ちたしと思ふ。心

内裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させることのよせなけれども、女院の御所など、借り申す故實なりとぞ。

註解　大臣の大饗は、大臣になれる披露の宴。●宇治大臣殿は從一位左大臣藤原頼長公。●よせは、縁故。外戚關係。●女院の御所は、皇太后の佛門に入り給ひて、門院の號ある御方の御殿。●故實は、法令・儀式などの古昔の事例。

○第百五十七段　筆を取ればもの書かれ

筆を取ればもの書かれと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤うんことを思ふ。心は、必ず、ことに觸れて來る。

は必ず物事に觸れて動く。假初にも善からぬ遊戯をすべからず。

一寸でも佛教の一句を見れば自然に其前後の句も目につき忽ち永年の心得違などをなほす事あり。例へば今、此本を見ざりしならば、どうして永年の心得違を知る事を得べき。これぞ觸るる所の利益なり。信仰の心動かずとも、佛前に坐して珠數つまぐりお經手にせば、怠る中にも知らず知らず善き所行出來、外物にかりにも、不善のたはぶれをなすべからず。

あからさまに、聖教の一句を見れば、何となく、前後の文も見ゆ。卒爾にして、多年の非を改むる事もあり。かりに今、この文をひろげざらましかば、この事を知らんや。これすなはち、觸るるところの益なり。心、更に起らずとも佛前にありて、數珠をとり、經をとらば、怠る中にも、善業、おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、おぼえずして、禪定なるべし。事理もとより二ならず、外相、もしそむかざれば、内證必ず熟す。しひて、不信といふべからず。仰ぎて、

向ふ心ながらも、坐禪の席につけば、自然と禪に入るものなり。所行と道理は二ならず外相にして背かずば内心もおのづと善くなる。故に無理に信ぜられずと云ふは不可なり事理の二ならぬ事を尊重するがよし。

●第百五十八段

「盃底の殘酒をすつる事は如何心得居るぞ」と或人の御尋れにつき、「凝當と申す故、殘れるを棄つとの意なるべし」と答へしに「然らず、魚道なり、少し流れを飲み殘し口のつきし所を洗ぐなり」と云はれたり。

●第百五十九段

みなむすびは、其結びさまが蜷に似たる故にかく云ふ」と

これを尊むべし。

註解 雙は、雙六のさい。●攤うつは、雙六の遊戯をすると云ふ。●あからさまは、かりそめの義。●聖教は、佛教。●卒爾は、にはかにたちまち。●善業は、善き所行。●繩床は、坐禪する坐。●禪定は、靜寂三昧に住すること。入定。●事理は、すわざと其道理。此處にては、眞如佛性の本性に歸するを言ひしもの。事は外形にあらはれし所作、理は其心なり。●外相は、外面にあらはれたるもの。內證は、妄りに顯示せぬ至極の妙理。又、內心と義。●これは、事理の二ならぬ事を指して云ひし語。

○第百五十八段　盃の底を棄つることは

『盃の底を棄つることは、いかが心得たる』と、ある人のたづねさせ給ひしに、『凝當と申し侍れば、底に殘りたるを棄つるにや候らん』と、申し侍りしかば、『さにはあらず。魚道なり。流を殘して、口のつきたる所を、すすぐなり』とぞ仰せられし。

註解 盃の底は、盃の底に殘れる酒の義。●魚道の出處、下學集に曰く、「魚道は、殘盃を建すなり。餘瀝を以て盃痕を洗ふ、之を魚の舊道を過ぐるに喩ふ。故に、魚道と云ふ。魚は大海に游泳すと雖も、終に舊道を忘れざる者なりと。

○第百五十九段　みなむすびといふは

『みなむすびとふは、絲を結び重ねたるが、蜷

或高貴なる方が言はれたり。「にな」といふは間違なり。

●第百六十段

門に額かくるを、うつと云ふはよからぬと見え、二品禪門は「額かくる」と仰せられたり。棧敷うつと云ふも惡しきものと見ゆ。ひらばりうつと云ふは普通の事なり。棧敷構ふるなど云ふべし。護摩たくも惡く、修する、護摩するなどいふなり。行法の法もすみてよむは惡しく、にごりて云うと清閑寺の僧正申されたり平生つかふ言葉に、この頼多し。

●第百六十一段

櫻の花ざかりなる頃は、冬至後百五十日とも、彼岸の中日後七日とも云ふけれども、立

といふ貝に似たればいふ』と、あるやんごとなき人、仰せられにき。『にな』と、いふは、あやまりなり。

註解 みなむすびは（組緒などの結び方。

○第百六十段　門に額かくるを

門に額かくるを、うつといふは、よからぬにや。勘解由小路の二品禪門は、『額かくる』と、のたまひき。見物の棧敷うつもよからぬにや。ひらばりうつなどは、常のことなり。棧敷かまふるなどいふべし。護摩たくといふもわろし。修する、護摩するなどいふなり。行法も、法の字を、すみて

いふわるし。にごりていふと、清閑寺の僧正、仰せられき。常にいふことに、かかるところのみ多し

註解 勘解由小路は、正二位參議行忠卿。二品禪門世尊寺と號す。●ひらばり（平張）は、平地に板を渡して天幕を張ること。●護摩は、焚燒又は火祭と譯す、故に「たく」と云ふ時は重複なり。密教にて、諸惡を燒き亡ぼすといふ意にて、火を焚きて佛に祈ること。●清閑寺は、京都清水の西南に在り、僧正は道我のことなるべし。

○第百六十一段　花のさかりは

花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違

春より七十五日と思はば、大抵ちがふことなし。

●第百六十二段

遍照寺の小使の僧、廣澤池の水鳥をつれ〴〵飼ひならし、堂内にまで餌まき、戸一枚明けおきけるが、數知れぬ程澤

はず。

註解　冬至は、二十四氣の一、陽暦にては毎年十二月二十二日頃にして、太陽が冬至點に達する時なり。北半球にては夜最も長く晝最も短し、南半球にては之に反す。陰暦にては十一月末にあたり、古來此日より春氣にかへるとて、一陽來復と稱し節日として祝ひなり。●時正は、彼岸の中日、卽ち春季皇靈祭日なり。

○第百六十二段　遍照寺の承仕法師

遍照寺の承仕法師、池の鳥を、日ごろ飼ひつけて堂の内まで餌をまきて、戸一つをあけたれば、數もしらず入り籠りたる後、おのれも入りて、たて

山はいりし後、自分も堂内へ入りて戸しめ、捕へては殺しさらへては殺すやうす、恐ろしき程に音せしを、草刈童子聞きつけ人に知らせたるに、村の男達出會ひ堂内に入りて見るに、大雁其他の鳥のあわて騷ぐ中に小使の僧まじり、うち伏せれぢ殺したる故、この僧をば捕へて檢非違使廳へつきだしたり。殺せる鳥を頸にかけさせて、監獄に入れられたり。基俊大納言が檢非違使廳の長官勤められし時なり

籠めて、捕へつつ殺しけるよそほひ、おどろ〴〵しく聞えけるを草刈る童聞きて、人に告げければ村の男ども起りて、入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せ、ねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を頸にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言、別當の時になん侍りける。

註解　遍照寺は、嵯峨に在りし寺院。●承仕は、雜役をつとむるもの。●よそほひは、やうす。●おどろ〴〵しくは、おそろしく。驚くべく。●ふためくは、あわて騷ぐ。●使廳は、

き。

●第百六十三段

太衝の太の字には、點うつべからずとの事、陰陽師の人々が議論されし事あり。もりちか入道は、「吉平が書ける占文の裏にかかれし記錄、近衛關白殿の家に在り、點打てるを書けり」と申されたり。

檢非違使廳。●別當は、檢非違使廳の長官。

○第百六十三段　太衝の太の字

太衝の太の字、點うつべからずといふ事、陰陽のともがら、相論のことありけり。もりちか入道、申し侍りしは、吉平が自筆の、占文のうらに書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり』と、申しき。

註解　太衝は、九月の異名。●陰陽のともがらは、陰陽師の人々。陰陽師は、古昔の官名、陰陽寮の所屬にして、卜筮方鑑の事を掌りしもの。●どもちか入道は、傳記不明。●吉平は、安倍晴明の子、陰陽博士たりき。

●第百六十四段

世の人互に相逢ひし時、寸時も物云はぬときもなし。きつと何事かの談話あり。その事を聞きみれば、大抵は無益の談話なり。世の中のうはさ、人のよしあし等にて、自身の他の爲に損多く得はすくなし。そして互に語る時分は、無益と云ふ事に氣づかず。

●第百六十五段

關東人が京都にまじはり、京都人が關東へゆきて身の振方をつくると、本寺本山を離れ

○第百六十四段　世の人あひ逢ふ時

世の人、あひ逢ふ時、しばらくも默止する事なしかならず、ことばあり。そのことを聞くに、多くは無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他のために、失多く、得少し。これを語る時、たがひの心に、無益の事なりといふことを知らず。

註解　默止は、物言はぬこと。●浮說は、根もはもなきうはさ。

○第百六十五段　あづまの人の

あづまの人の、都の人にまじはり、都の人の、あづまに行きて身を立て、また、本寺本山を離れぬる顯密の僧、すべて、わが俗にあらずして、人に

し天台、眞言の僧などが、すべて自身が俗人ならぬに、俗人にまじはる、見にくきものなり。

●第百六十六段

世人がする事業を見るに春のぬくき日に雪逢摩を作り、其爲に金銀や珠玉の飾をつけたる堂や塔を建立するにひとし其落成をまち、果して其雪逢摩を安置するを得べきか。人の壽命あると見て居る中に、きえゆく事は雪逢摩の雪のやまじはれる、見ぐるし。

註解　あづまは、吾妻または東の字を用ふ。關東の稱。●都は京都。●顯密は、顯教と密教と。顯教は天台宗、密教は眞言宗。●わが俗云云は、自身が俗人でないのにとの義。

○第百六十六段　人間の營みあへるわざ

人間の營みあへるわざを見るに、春の日に雪佛を作りて、そのために、金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔を建てんとするに似たり。そのかまへを待ちてよく、安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪の如くなる中に、いとなみ待つこと、甚だ多し。

うなるに、樣々の事業を經營して期待する事は極めて多し

●第百六十七段

一藝に心を寄する人、其藝以外の席に列し、「ああ、自分が心得居る藝ならんには、斯うまそに見はせず」と口へ出す。心中に思ふのは普通なるも口へだすは惡く思はる。知らざる藝をうらやましくは、「ああ、羨まし、何故に學ばざりしぞ」と言ひたきものなり。

註解　雪佛は、ゆきだるま。●そのかまへは、其結構、卽ち造ること。●安置は、佛像などをまつり納むること。

○第百六十七段　一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて『あはれ、わが道ならましかば、かく、よそに見侍らじものを』といひ、心に思へること、常のこととなれど、よにわろくおぼゆるなり。知らぬ道のうらやましくおぼえば、『あなうらやまし、などか、習はざりけん』と、いひてありなん。

註解　一道にたづさはるは、一つの藝道に心を寄すること。一藝に關係すること。●あらぬ道の云云は、自身の關係ぜぬ

自身の智慧を以て人と爭ふは角もつ獸が突かんとして角傾け、牙もつ獸の牙をかみ出すに同じ。人たるものは、善事を自慢せず、物事を爭はざるが德と云ふべし。人よりすぐれたる事あるは、甚しき過失なり。品位の高きも才智藝能の超えたるも、祖先の名譽にても、他に超えすぐれたりと思ふ人は、よし口外せずとも其心の内には幾分かの自慢の罪あり。よく考へて、この自慢を忘るるべき。愚にも見

藝道の席にゆきて。●よにわろくは、此上もなく非常に惡しく。よには、惡しきを強あて言ひし語。實にの義。

わが智をとり出でて、人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出す類なり人としては、善にほこらず、ものと爭はざるを德とす。他にまさることのあるは、大なる失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひことばに出でてこそ言はねども、内心に、そこばくのとがあり。愼みて、これを忘るべし。をこにも見えん、人にも言ひけたれ、わざはひをも招くは

え、人にも言ひけなされ、禍害を求むるは只この自慢心なり。一藝に善く達したる人は自身に明かに自慢心の惡しきを知るが故に、意志はいつも自身の藝に滿足せずして、一生涯人に自慢する事なし。

●第百六十八段

老人にして或一藝にすぐれしただこの慢心なり。一道にも、まことに長じぬる人は、おのづから明かに、その非を知る故に志常に滿たずして、遂に、ものに誇ることなし。

註解　善にほこらずの出處は、論語に「顏淵曰、願無伐善」

この句なり。爭はざるを德とすの出處は、論語に、「子曰く君子無所爭」との句なり。●品は、しな。品位。●そこばくのとがは、幾分かの罪。●言ひけたれは、言ひけなされ。けは消の字を用ふ。●をこ（烏滸）は、痴の字をも用ふ。笑ふばかりにおろかなること。●志常に滿たずの出處は、曲禮に「志不可滿、樂不可極」とあり

○第百六十八段　年老いたる人の

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、

才能を有し、、此人の死後には、何人に斯道の事に教を請はん」など言はるるは、老人の味方にて生きて居ても徒爾には非ず。併し、いつ迄も衰へすにやり居るは、終生此事にて暮したるかさまづく見ゆ。もう年寄り故、忘れたりと言ひたきものなり。大體を心得居るとも、むやみに放言するは、さ程の才能になき樣に聞え、又自然に間違もあるべし「たしかには存ぜず」など言ひたるは、一入奥床しく、斯道の達人とも思はるべし。況んや、知らざるを知れる顔して、老熟して反對する事能はざる人の言説するをば、然らずと思ひつつ聞き居るは大にいとふべし。

●第百六十九段

「何々の儀式と云ふ事は、近世の言葉には、後嵯峨帝の御字までば言はれざり」と、或人の申したるに、建禮門院の

この人の後には、誰にかは』など、言はるるは、老の方人にて、生けるもいたづらならず。さはあれど、それも、すたれたる所のなきは、一生、この事にて暮れにけりと、拙く見ゆ。今は忘れにけりと、いひてありなん。大かたは知りたりとも、すずろに言ひちらすは、さばかりの才にはあらぬやと聞え、おのづから、あやまりもありぬべし、『さだかにも辨へ知らず』など言ひたるは、なほまことに、道の主とも覺えぬべし。まして、知らぬこと、知りがほに、おとなしく、もざきぬべくもあらぬ人の、言ひ聞かするを、さもあらずと思ひながら、聞きあたる、いとわびし。

註解　○この人の後には、この人の死後には の義。●老の方人は、老人の味方。●すたれたるは、衰へたる。すたりゆく。●すずろ(漫)に、やたらに。むやみに。●道の主は、斯道の達人、其道の棟梁。●おとなしくは、大人の如く、諸事おちつきてあること。老成の義。●もざきは、反對すること。さからひて批難すること。

○第百六十九段　何事の式といふ事は

『何事の式といふ事は、後嵯峨の御代までは、いはれざりけるを、近き程よりいふ言葉なり』と、人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽

右京の太夫、後鳥羽天皇の御即位後、再び禁中へ住みし事を書けるものに「世の儀式は別に變りしことなきにも」と見えたり。

●第百七十段

格別の用事もなきに人の許にゆくは、宜しからぬなり。用事ありて訪ひたりとしても、其事すまば早く歸るべし。長居は大によろしからず。人に相對して居れば口數多く身體もつかれ、心もおちつかず、萬事の防害となるが上に時間をつぶす、双方に益なし。されど、眼はしげの應接するは惡し。氣乘せざる事ある節は、却て其わけを打明すがよし。

「氣合ひ相對したしと思ふ人の無聊にて、一も暫く、今日はゆるりと」など言はば、長くゐてもよし。」阮籍が青眼、誰

院の御位の後、また内裏住したることをいふに、『世の式もかはりたることはなきにも』と、書きたり。

註解 式は、ぎしき。●後嵯峨の御代は、第八十八代後嵯峨天皇の御字。●建禮門院は、第八十代高倉天皇の皇后、安德帝の御母。●右京太夫は、藤原伊行の女、建禮門院に仕へし女官。●後鳥羽院は、第八十二代の天皇。●また内裏住は、源平の兵亂平ぎてのち再び禁裏に住みしを云ふ。

○百七十段　さしたる事なくて

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、疾く歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。

註解 さしたる事なくては、これと云ふ程の用事もないのに。●はてなば、濟んだならば。●いとしづかしは、極めていとはし。甚だよくないとの義。

人と對ひたれば、言葉多く、身もくたびれ、心も靜ならず　萬の事さはりて、時を移す、互のため益なし。いとはしげに言はんも惡し。心づきなき事あらん折は、なか〳〵、その由をも言ひてん。

註解 いとはしげ云云は、うるささうに受答をしても失敬になるとの義。●心づきなきは、心にそはぬ。氣乘のせぬなどの義。●なか〳〵は、却て。●その由は、氣乘のせぬわけ。

同じ心にむかはまほしく思はん人の、つれ〴〵に

人にもあるべき事なり。
これと云ふ程の大事にあらで友人など訪ひきたり、ゆるりと談話して歸りたるは、大によし。又手紙も、あまり御不沙汰ゆゑ只一筆と言ひきたるは、殊に嬉しきものなり。

て、『今しばし、けふは、心靜に』など、言はんは、この限にあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。

註解　阮籍は、竹林七賢の一人。青き眼は、喜びて視る目つき。人と相親しむ意なり。晉書の阮籍傳に曰く「籍、禮敎に拘らず。能く青白の眼を爲す、禮俗の士を見れば、白眼を以て之に對す。嵇喜が來るに及び、卽ち籍、白眼を爲す。喜懌びずして退く。喜が弟の康之を聞き、乃ち酒を齎し琴を挾みて造る爲。籍大に悅び、乃ち青眼を見る。是に由り禮法の士、之を疾むこと讎の如し」と見ゆ。

その事となきに、人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。又、文も、久しく聞えさせねばとばかり、言ひおこせたる、いとうれし。

註解　その事となきには、それと云ふ用事ないのに。久しく云云は、餘り御不沙汰するから、一寸御見舞をすると簡短に通信ありしがよしとの義。

○第百七十一段　貝をおほふ人の

貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見渡して、人の袖のかげ、膝の下まで、目をくばるまに、前なるをば、人におほはれぬ。よく掩ふ人は、よそまで、わりなく取るとは、見えずして近きばかり掩ふやうなれど、多く掩ふなり。

註解　貝をおほふ人は、かひおほひをする人。貝おほひは、貝

貝合して遊ぶ人の、自分の前のをすておき他を見やり、人の袖のかげや脇のしたまで目にて詮議するまに、自分の前のを却て人に取らる。貝合の名人は、無理に取るやうすは見えで、自分の手近のもののみ掩ふに似たれども、多く

おほひて終に勝つなり。

碁盤の隅に石を立ててはじき落すには、向ふの石を目あてとして彈かば中らず。自分の手元をよく見きはめ、前の聖目の所を眞直に彈かば、きつと立てる石に中る。萬事外に向ひて求めてならず、只々自分の手もとを正しくすべし。

清献公の座右の銘に、「よき事をして、將來の報いを思ふまじきぞ」とあり。國家を保有する道も亦斯くなるべし。

自身その行ひをみだりこし、合に同じ、一種の遊戯。●わりなくは、無理に。やたらに。

碁盤のすみに、石を立てて彈くに、むかひなる石を守りて彈くはあたらず、わが手もとをよく見てここなる聖目を、すぐに彈けば、立てたる石、必ずあたる。

註解 聖目は、せいもく(井目)なり。

萬の事、外にむきて求むべらかず。ただ、ここもとを正しくすべし。清献公がことばに『好事を行じて、前程を問ふことなかれ』と、いへり。世をたもたん道も、かくや侍らん。内を慎まず、輕くほしきままにして、遠國、必ずそむく時、はじめ

輒卒にも放肆なる事のみして内政亂るれば、遠方の國々は必ず謀叛す、その時に至りて初めて計略を立つるは、不養生して風に吹かれて風ひき濕地にいれて病氣になり、其全治を神に祈るは愚者なり

と醫書に書けると同じ事なり眼前なる人民の憂患をとどめ恩惠をあたへ、治むる道さへ正しくせば、その教化は領土のはて迄偏くおよび、自然と遠國の民と歸服すると云ふ事を知らぬなり。夏の禹王が出て謀を求む。『風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは、おろかなる人なり』と、醫書にいへるが如し。目の前なる人の、愁をやめ、惠をほどこし、道をただしくせば、その化、遠く流れんことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、軍をかへして、德をしくには如かざりき。

註解 清献公は、宋の超扑なり。清献は謚號、仁宗・英宗・神宗の三朝に歷仕して參政となる。●好事云云の句は、清献公が座右の銘の一。●内を慎まず云云の出處は、大學の「明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其國を治む。其國を治めんと欲する者は、先づ其家を齊ふ」又、論語の註に「内

で三苗を征伐せしも服せず軍隊を退けて、德政をしきしにますものなかりき。

●第百七十二段

若年の時は血氣内にあふれ心は物に動き易く、情欲多し身を危地に陷いれ失敗するに造作なきこと、玉を轉ばすやう也。身なりの美麗を好みて財寶を費消しもしたり、又之をすてて隱遁者のやうに身や

治り修つて、後に遠人服す。服せざることあらば、則ち德を修めて以て之を來す」とあり。●三苗は、南方の夷蠻の名夏の禹王征伐すること三旬、終に服せず、禹王は之を悔い、軍隊をかへして德政を布かれしが、三苗の直に服せりとの故事。

○第百七十二段　若き時は

若き時は、血氣、内にあまり、心、物に動きて、情欲多し。身をあやぶめて碎けやすきこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを棄てて、苦の袂にやつれ、勇める心さかりにして、物と爭ひ、心はおうらやみ、好む所、日々

つしなどす。雄心勃々として物と相爭ひ、萬の事につけて身を恥ぢたり他人の事を羨みたり、其欲する所日々に動きて定まらず。時に或は色情に心を奪はれ、時に或は愛情にほだされ　又或は自分の行ひを潔よくして一生を誤り、命を落せる例を願はしき事に思ひ、身の安全をはかりて長久ならんを考へず、好む物事の方に心を引きつけられ、後世までも語り草となる。すべて一身を誤ることは、若年の

に定まらず。色に耽り、情にめで、行をいさぎよくして、百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくして、身のまたく久しからんことをば思はず、すける方に心引きて、長き世語ともなる身をあやまつことは、若き時のしわざなり。

註解　血氣は、はやり心。客氣。論語に「少き時は血氣未だ定まらず、之を戒しむる色に在り」と見ゆ。●情欲は、色情の心。又、情と欲。情は、感じて起る心の動き。欲は、願ひもとむる心。●苦の袂にやつれは、隱遁者の姿をよそほふこと苦の袂は、羅衣の義。隱者の着る衣に云ふ語。僧正遍昭の歌に「皆人は花の衣になりにけり苦の袂は乾きだにせよ」とあり。●長き世語は、後世までもの話のたね。

時の行爲なり。

老人は精神衰へ血氣すくなく情には淡く、物事に感動する所なし。心おのづから落着く故、無益の行爲をせず、身を大切にして心配もなく、他人に迷惑かけまじと考ふ。年ふけて智惠の若年の頃に勝る事は、若き時の容貌が老人にまされると同じきなり。

●第百七十三段

小町が事蹟は、極ふたしかなり。老後のありさまは、玉造といふ書物にも見ゆ。此書物

老いぬる人は、精神衰へ、淡くおろそかにして、感じ動くところ無し。心、おのづから靜なれば、無益のわざをなさず、身をたすけて、愁なく、人のわづらひなからんことを思ふ。老いて、智の、若き時にまされる事、若くして、かたちの、老いたるにまされるが如し。

註解 淡くおろそかは、淡薄にして物事に執着なきを云ふ。●思ふは、思慮をめぐらすを云ふ。

○第百七十三段　小野の小町がこと

小野の小町がこと、きはめてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ書に見えたり。この書、清行が筆との說あるも、弘法大師の御著作目錄に加はり居れり。大師は承和の初めに入寂せられたり。小町が全盛時代は、大師入寂後の事かとも考ふ。かれこれ此玉造の說も確實にあらず。

●第百七十四段

小鳥捕るに善き犬を、雉子の類を捕るに使ふ時は小鷹狩に適せぬやうになると云ふ。一度大きなる物に目のつくと、清行が書けりといふ說あれども、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は、承和のはじめにかくれ給へり。小町がさかりなること、その後のことにや、なほおぼつかなし。

註解 小野小町は、歌人、確實なる傳記なし。●玉造は、玉造小町子壯衰書と云ふ本。●清行は、三善清行。●高野大師は弘法大師卽ち空海。●承和は、年號の名、仁明天皇の御宇

○第百七十四段　小鷹によき犬

小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわるくなるといふ。大につき、小を捨つることわり、まことにしかなり。

小さきを物捨てて心におかぬ道理、實に然なり。

人事多き中に、佛道を樂しむ程、外にまされる深き趣はなし、これぞ眞實人生の大事なり。一度佛法をきき之に心を寄する人は、何事にても捨て易くなる。又この大事なる佛法の外に、營む事業のあるべき、愚人といへども、賢き犬の心に下りはせじ。

●第百七十五段

世の中には、合點のゆかぬ事多し。何事かあるたびに酒をたし。無理に飲ませて面白がること、何故とも合點ゆかず飲ませらるる人の顏つき辛さうに眉ちぢめ、人目ぬすみて棄てたく、又逃げんとするを捕へ止めて、むやみに飲ませれば、優美な人も狂人となり達者な人も大病人となり、前後をも知らずにねこむ。祝賀の日などは、あきれはつる事なるべし。翌日迄頭痛し、食ずにうめき臥し、死したる樣にして、昨日の事知らず、公私の要用をかきて他の迷惑と

註解 小鷹・大鷹は、鳴・鶉などの小鳥を捕るに使用するなは小鷹。雉子の類を捕るに使用するなは大鷹と云ふ。

人事多かる中に、道を樂むより、氣味深きはなしこれ、まことの大事なり。一たび、道を聞きて、これに志さん人、いづれのわざか、すたれざらん何事をか營まん。愚なる人といふとも、かしこき犬の心に劣らんや。

註解 大事は、佛道をさして云ひし語。

○第百七十五段　世には心得ぬ事の多きなり

世には、心得ぬ事の多きなり。ともあるごとにまづ酒をすすめて、强ひ飲ませたるを興とすることいかなる故とも心得ず、飲む人の顏、いと堪へがたげに、眉をひそめ、人目をはかりて、棄てんとし、逃げんとするを捕へて、引きとどめて、すずろに飲ませつれば、うるはしき人も、忽に、狂人となりて、をこがましく、息災なる人も、目の前に、大事の病者となりて、前後も知らず、仆れ臥す。祝ふべき日などは、淺ましかりぬべし。あくる日まで、頭いたく、物食はず、によび臥し、生を隔てたるやうにして、昨日のことおぼえず、公私の大事をかきて、わづらひとなる。人をして、

なろ。人に斯る憂目にあはするは、情もなく禮儀にも背けるわけ也。その憂目にあひし人は、恨めしく殘念と思はずに居るべきか。若し他國に此例ありて、我國に此例なくして聞かば、不思議にも疑はしき習慣とや思はん。

他人の身の上にて見るさへ、酒に酔ひしさまは厭はし。思慮深く奥床しと思ひし人も、考へなく笑ひをめき、口數多く、烏帽子ゆがみ、紐とき着物の裾を高くかかげ、行儀

かかる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。斯くからき目にあひたらん人、ねたく、口惜しと思はざらんや。他の國にかかるならひありと、これらになき人ごとにて、傳へ聞きたらんは、あやしく、不思議におぼえぬべし。

註解 心得ぬ事は、譯のわからぬ事。道理のわからぬ事。●さもあることには、兎もあり角もある度にの義で何事か有る毎に。●すずろには、むやみに。●息災は無病健全なること。●大事の病者は、たいへんな病人。●祝ふべき日は、節句・婚禮などの如き、すべて目出度慶賀すべき日。●淺ましかりぬべしは、あきるる事なるべしと歎息したる語。●によび臥しは、うん〳〵とうめきぬること。●生を隔て云云は、時代に注意なきさま、平生の如き人とも思ひ難し。女子は額際までかきあげ、恥づる樣子もなく顏あげてから〳〵と笑ひ酒盃持てる人の手にすがり、下品な人は肴取りて人の口にさしつけ、自分も亦食ふなどていさい見にくし。有るだけの聲出し、皆歌ひつ舞ひつ、老いし盲法師つれきたり、黑くきたなき身なるを肩ぬがせ厭はしきまで身を曲げて踊るを、愉快がりて見る人までがつまはじきする程に憎し。或

を異にする義。死んだやうにしてとの意。●大事をかきては大切なる用事をせずに。●あなりとは、有るなりとの義。●これらは、是等。我國の義。●あやしくは、うたがはしとの義。

人の上にて見るだに、心憂し。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふところなく、笑ひののしり、ことば多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし脛高くかかげて、用意なき氣色、日頃の人ともおぼえず。女は、額髮はれらかにかききり、まばゆからず、顏うちささげてうち笑ひ、盃もてる手にとりつき、よからぬ人は、肴とりて、口にさしあ

は又、自慢話を可笑しさに堪へぬ迄も言ひ、或は酔ひて泣く。下等の人は、罵りあひ、口論し、あきるるまで恐ろしく、外聞悪く不愉快なる事のみし出來し、終には人の承知せぬ物を無理にとりて縁より落ち、馬や車よりも落ちて怪我す。馬や車に乗らぬ身分は大路を千鳥足してゆき、塀や門の下などに向ひ、口にしがたき事をほしいままになし、老人の袈裟かけし僧が、小供のかたに手をかけ、わからぬ

てみづからも食ひたる、様悪し。聲のかぎり出して、おの〳〵、歌ひ、舞ひ、年老いたる法師、召し出されて、黒くきたなき身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ、疎ましく憎し。あるは又、わが身いみじきことども、かたはらいたくいひ聞かせ、あるは酔ひ泣きし、下ざまの人は、のりあひ、いさかひて、浅ましく、おそろしく、恥がましく、心憂きことのみありてはては許さぬ物どもおし取りて、縁より落ち、馬車より落ちて、あやまちしつ。物にも乗らぬきは、大路をよろぼひ行きて、築地、門の下などに

事言ひ、ひよろつき居るは、かあいさうなる程に見苦し。斯の如き事しても、現世にも後世にも益のあるならば、何とも何方なし。けれど、益なき敎につつしむぞよき。此世の中にては過失多く、財産をつぶし且つ病氣を招く。古來百藥の長と云はるれども萬病はみな酒に原因す。うさを晴すと云ふも、酔ひし人は昔の心配事まで思ひだして泣くかと思はる。若し後世の事を云ひもせば、人の智慧を向きて、えも言はぬことども、しちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬことどもいひつつ、よろめきたる、いとかはゆし。かかる事をしても、この世も後の世も、益あるべきわざならば、いかがはせん。

註解 心にくしは、奥ゆかしい。●笑ひのしりは、笑うて大聲で打ち騒ぐこと。●用意なき氣色は、つつしみなきやうす。●はれらかには、額ぎはの髪をあらはに掻きあぐること。●まばゆからずは、恥かしがらぬとの意。●すぢりたるは、身を曲げくねらし舞ひたること。●疎ましく憎しは、うとんずべくいまはしとの義。●わが身いみじき云云は、自慢話をかしさに堪へぬ程言ひてとの義。●のりあひ(罵合)は、悪口な

なくし、善根を燒きすつること火のやうにて惡業をまし、さまゞの佛戒を犯し、地獄に落ちん。酒を人にすすめたる人、五百度生れかはる毎に手なき虫けらに生れ來ると、佛は說かれ居れり。

斯樣に遠ざくべき酒なれど、自然にすて難き折もあらん。月の冴えし夜や雪の降りし朝花下などにて閑談して、酒のみたるは、何かと面白味を添ゆるしかたなり。淋しき時、思ひがけぬ友人訪ひ來、酒酌しあふこと。●物にも乘らぬさはは、馬や車などに乘らぬ身分の人は。きはは、ぶんさいの義。身分。●よろぼひは、よろ〳〵して歩くこと。●えも言はぬことごもは、言ふに言はれぬ事など。●いとかはゆしは、極めて可哀想な程見苦しと。そしれる語。稚氣愛すべしと解するは非なるべし。

この世にては、あやまち多く、財を失ひ、病をまうく。百藥の長とはいへど、よろづの病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、醉ひたる人ぞ、過ぎにしうさをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智惠を失ひ、善根を燒くこと、火の如くして惡をまし、よろづの戒をやぶりて、地獄に落つゞ

みしも亦心を樂しましむ。高貴なる方の御簾の内より、御菓子、御酒など、美しき人と思はるる樣子にて差出されたるは、殊によし。冬の時候に小室にて、すき燒などして親友と相對し、したたか飲みしも亦おもしろし。旅の宿屋さては野遊などして、「御着は何ぞ」などと言ひ、芝原を席にして酒酌みたるも興あり。酒嫌ふ人のおしつけられ、少々飲みしもあしからず。貴人が分けて聲掛け、「まだ杯にみし。酒をとりて、人に飲ませたる人、五百生が間手なきものに生るるとこそ、佛は說き給ふなれ。

註解 百藥の長は、酒を讃めて言ひし語。前漢書に、「夫れ鹽は食肴の將、酒は百藥の長なり」とあり。●憂を忘る云云は古樂府の「何以忘レ憂唯有二杜康一」に基づく。杜康は造酒を發明せる人。轉じて、酒の異名。●善根は、慈善の所行。卽ち善き應報を受くべき所業。●戒は、非をふせぎ惡を止むると。又、其制。●五百生は、五百度生れかはる義。梵網經心地法門品に曰く「若し自身手から酒器を造り、人に與へて酒を飲ましむる者は、五百世手無し。何ぞ況や、自ら飲むものをや」と見ゆ。手無しは蛇の如き爬蟲類に生れ來るを云ふ

斯〳〵疎ましと思ふものなれど、おのづから棄て難

たず、十分に受けよなど」仰せられしは嬉し。親しくせんと思ふ人の飲手にて、舊友のやうになれたるも又うれし。しかし、飲手は面白き故、少々の過失は見逃さるるものなり。

酒に醉ひつかれて朝寢したる折、其家の主人襖ひき明けたるに、あわて寢とぼけたる顏をし乍ら、根のゆるみし髮を前にだせるまま、脫ぎし衣服をいだきこみ、引きずりつつ逃げゆく帶解姿のうしろつき、毛脛のあたり見るも可笑しく似合はしかりき。

き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して、盃出したる、よろづの興を添ふるわざなり。つれ〴〵なる日、思ひの外に、友の入り來て、とり行ひたるも、心なぐさむ。なれ〳〵しからぬあたりの御簾の中より、御くだもの、御酒など、よきやうなるけはひして、さし出されたる、いとよし。冬、狹き所にて、火にて、ものいりなどして、隔なきごち、さし向ひて、多く飲みたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて、『御肴なに』などと言ひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、しひられて、少し飲みたるも、いとよし。よき人のとりわきて、『今一つ、上少し』など、のたまはせたるもうれし。近づかまほしき人の、上戸にて、ひし〳〵と馴れぬる、又うれし。さはいへど、上戸は、をかしく、罪許さるるものなり。

註解

たりのは、さり行ひたるは、酒宴をしたる。●なれ〳〵しからぬあものいりは、手料理の義。貝燒、すき燒の類。●いたういたむ人は、酒飲む事をつらがる人。●上少しは、杯にみたす倘注ぐべき餘裕のある云ふ。●近づかまほしき人のは、親しく交際せんと思ふ人の。●上戸は、酒すき。さけのみ。戸は酒を飲む量。白樂天の句に「戸大嫌甜酒」とあり。

●第百七十六段

黒戸は、光孝天皇御即位在らせられし後も、昔なみの人にて民間にいらせられし頃、御自炊御料理など遊ばされし事を忘れさせで、常々御自身に煮たき遊ばされし御部屋なり御薪の烟の爲にすすけたる故、かく黒戸と申すよしなり

醉ひくたびれて、あさいしたる所を、主人の引きあけたるに、惑ひて、ほれたる顔ながら、細き髪さし出し、物も着あへず、いだき持ち、引きしろひてにぐるかいどり姿のうしろで、毛生ひたる細脛のほど、をかしくつきづきし。

註解　あさいは、朝寢なり。●ほれたる顔は、れとぼけ顔。●かいどり姿のうしろでは、衣服をかき取り持ちゆくうしろつき。●つきづきしは、似合はし。ふさはし。

○第百七十六段　黒戸は小松の御門

黒戸は、小松御門、位に即かせ給ひて、昔、ただ人におはしまし時、まさなごとせさせ給ひしを忘れ給はで、常に營ませ給ひける間なり。みかま木にすすけたれば、黒戸といふとぞ。

註解　黒戸は、清涼殿の北なる瀧口の戸の西に在り。●小松御門は、第五十八代光孝天皇なり。●ただ人は、なみの人。民間におはせしを云ふ。●まさなごとは、つまらぬ事。即ち御自身に料理などなし給ひしを云ふ。●間は、室の義。おへや●みかま木は、御竈木なり。おんたきぎ。

●第百七十七段

鎌倉中務卿宗尊親王の御館にて、御鞠あそび催されし時、雨後の庭いまだ乾かず、如何にすべきかと御尋れありしに

○第百七十七段　鎌倉中書王にて

鎌倉中書王にて、御鞠ありけるに、雨降りて後、いまだ庭の乾かざりければ、いかがせんと、沙汰ありけるに、佐々木隱岐入道、鋸の屑を、車に積

佐々木入道はかしこまり、鋸屑を運びて御庭一面に布き、泥土のうれひを除きたり、鋸屑を貯へおける用意、まことに珍らしと人々感心しぬ。此事を或人語りしに、吉田中納言の、「乾ける砂の用意は何故せざりしぞ」と仰せたりしが深くはぢ入りたりき。妙と思ひし鋸屑賤しく、異様の事なり。御庭の事を受持つ役人乾ける砂を用意するは、古昔の事例なりと云ふ。

みて、多く奉りたれば、庭にしかれて、泥土のわづらひなかりけり。とりためけん用意、あり難しと、人、感じあへり。このことを、あるものの語り出でたりしに、吉田中納言の、『乾砂の用意やはなかりける』と、のたまひたりしかば、恥かしかりき。いみじと思ひける鋸の屑、いやしく、ことやうのことなり。庭の儀を奉行する人、乾砂をまうくるは、故實なりとぞ。

註解 鎌倉中書王は、中務卿宗尊親王。中書は、中務の唐名。王は、親王なるが故なり。●鞠は、蹴鞠の御遊。●佐々木隠岐入道は、佐々木太郎左衛門源政義なり。入道して心願ぞ號せり。●吉田中納言は、萬里小路藤原藤房卿。●乾砂云云は、鞠場に鋸の屑をしきて濕氣を去り、その屑を拂ひて砂をまくことなり、どうして其用意は爲さざりしかとの義●故實は、古昔の事例。

●第百七十八段

或所の侍達が、内侍所の御神樂を拜觀し、「寶劍をば誰々が持ち居られたり」など人に語るをうち聞き、「別殿の行幸には、晝の御座の御劍であるのに」と、女官の誰かが、小聲にて言ひしは、奥床しかりき。言ひし人は、年久

○第百七十八段　ある所の侍ども

ある所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人に語るとて、『寶劍をば、その人ぞ持ち給へる』など、いふを聞きて、うちなる女房の中に、『別殿の行幸には、晝御座の御劍にこそあれ』と、しのびやかに言ひたりし。心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

しく典侍つとめられし人とか

●第百七十九段
入宋の僧の道眼上人、一切經をもちかへり、京の六波羅あたりの燒野と云ふ所に藏しおき、特別に首楞嚴敎を講釋して、其寺院を那蘭陀寺と命名したり。上人の云はるるに、「印度の那蘭陀寺の大門は北向なり」と、大江匡房の說として傳ふれども、西域傳や法顯傳等にも曾て見當らず、其外にも見たることなし。大江匡房は、如何なる研究の結果にて云はれしか、ふたしかなり。支那の西明寺は北向のこと、云ふまでもなしと申されぬ。

註解 内侍所は、古昔、禁中の溫明殿の別名、八咫御鏡を安置せられし所。今は賢所と申す。●別殿は、内侍所を申す。●晝御座の御劍云云は、古昔は御劍二口あり、寶劍は神璽と共に夜の御殿の御帳の中御枕の上に安置す。晝の御座の御劍は清涼殿に在りて、御神樂行はるるとて、内侍所へ行幸ある時持たせ給ふ故、この晝御座の御劍なり、然るを、侍が寶劍と誤りいひしを、古く仕へ居る典侍が正せるなり。●典侍は、内侍の次位なる女官。

○第百七十九段　入宋の沙門道眼上人

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、燒野といふ所に安置して、ことに、首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、『那蘭陀寺は、大門、北むきなり』と、江帥の說とて、いひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず。さらに、所見なし。江帥は、いかなる才覺にて申されけん、おぼつかなし。唐土の西明寺は、北むき、勿論なりと申しき。

註解 入宋の沙門は、宋國に渡れる僧。●一切經は、佛敎の經典の總名、經・律・論の三藏を云ひ、すべて七千餘卷あり。●六波羅は、京都下京區大佛を中心しての舊稱。●首楞嚴經は、有名なる佛書の名。●那蘭陀寺は、天竺卽ち今の印度なる寺院の名を取り、建立せし寺の名とせしなり。●江帥は、大江匡房を云ふ。帥は、太宰帥なりし故なり。●西域傳など、支那の天竺に渡りたる記錄。●法顯傳は、法顯の天竺に渡り

●第百八十段

左義長といふものは、むかし正月の十五日に行はれし悪鬼祓の儀式にして、清涼殿の御庭に青竹を立て、之を焼きて行ひたり。それを眞言院より神泉苑へいそがだしてやきたりその時、「法成就の池にこそ」と囃すは、神泉苑の池をいふなり。

たる記録。●才覚は、考への義。研究の意に取るべし。

○第百八十段　左義長は

左義長は、正月にうちたる義長を、眞言院より神泉苑へ出して、焼きあぐるなり。『法成就の池にこそ』と、囃すは、神泉苑の池をいふなり。

註解　左義長は、古昔、正月十五日に行はれし悪鬼祓の儀式、清涼殿の庭に青竹を立て、之を焼きて行はれたり。爆竹。俗間にも行はる。●義長は、毬打の字をも用ふ。古昔、正月に行はれし小兒の遊戯、槌の如き杖に五彩の絲をつけ、これを以て木製の球を打ちしもの。●眞言院は、後七日御修法の道場にして、宮中に在りき。●神泉苑は、京都上京區御池通大宮西へ入る門前町に其一部分を存す。◎法成就の池は神泉苑の門内にあり。小野小町、乞雨の和歌を詠じたる、弘法大師天竺無熱地の善雨龍王を勸請して雨を祈れるなど人口に膾炙す。

●第百八十一段

「ふれ〳〵こゆき、たんばのこ雪」といふは、雪の降るさま、米をつき糠をふるふに似たるより、粉雪といふにて「たんばのこ雪」と云ふは、「たまれこゆき」の言ひ誤りなぞ。「垣や木のまたに」と歌ふべしと、或識者が云ひたり。古來云ひし事と見え、鳥

○第百八十一段　ふれ〳〵こゆき

『ふれ〳〵こゆき、たんばのこ雪』と、いふことは米搗き、篩ひたるに似たれば、粉雪といふ。『たまれこゆき』と、いふべきを、誤りて、『たんばの』とはいふなり。『垣や木のまたに』と、歌ふべしと、あるものしり申しき。昔より言ひけることにや、鳥羽院、をさなくおはしまして、雪の降るに、斯く仰せられける由、讃岐典侍が日記に書

羽上皇御幼少の時分、雪降るに斯くのたまひしおもむき、讃岐典侍の日記に載せられたり。

●第百八十二段

隆親卿、千鮭を天子の御膳に奉られしを、「斯る下賤のもの召上がる事もあるまじ」と或人の言ひしを聞きて大納言、「鮭といふ魚、めしあがらぬものならば兎も角も、鮭を召上がるからは、この干鮭さし上げしとて、如何なる不都合のあるべき。鮎の白乾はきたり。

註解 鳥羽院は、第七十四代の天皇。●讃岐典侍は、堀川天皇の女官、日記三卷あり。

○第百八十二段　四條大納言隆親卿

四條大納言隆親卿、からざけといふものを、供御に參らせられけるを、『かくあやしきもの參るやうあらじ』と、人の申しけるを聞きて、大納言、『鮭といふ魚參らぬことにてあらんにこそあれ、鮭のしらぼし、なでふ、事かあらん。鮎の素干は參らぬかは』と、申されけり。

註解 四條大納言隆親卿は、善勝寺大納言ともいふ。權大納言

召上がられぬか」と云はれたり。

●第百八十三段

人に突きかかる牛は角きり、人かむ馬は耳をきりて其記號とす。しるしをせずして、人に怪我させたる時は、飼主の罪なり。人にかみつく犬は、飼養すべからず。是等は何れも皆罪科なり。法律の禁ずる所なり。

正二位楊非違使の別當たりき。●からざけは、干鮭なり。ほしたる鮭。●なでふは、俗に何條の字をあつ。何といふの約、どうして。何として。

○第百八十三段　人突く牛をば

人突く牛をば、角をきり、人くふ馬をば、耳をきりて、そのしるしとす。しるしをつけずして、人をやぶらせぬるは、主のとがなり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみな、とがあり。律のいましめなり。

註解 律のいましめは、法禁の義。厩牧律に曰く、「凡そ牛馬及び犬、人を觝觸蹋咬するありて、記號栓繫、法の如くせず

●第百八十四段

北條時頼の母は、松下禪尼と云ふ。或日、時頼を招かるる事ありしが、黒く煤ばみし障子の破れし個所のみを、禪尼は自身に小刀にてきりまはしつつ繕はれしが、其兄の秋田城介義景、今日の世話し居られしが、「其仕事を此方へ下されたし、何某に貼らすべし斯る事には手馴れたる者なりといひしが、「其男は、此尼が細工よりまさか上手にもあるまじ」と、矢張障子の破れし一仕切づつ貼りかへられしを、義景は又「殘らずはりかへ給ばば、却てすつきたやすくおはすべし、古きと新しきと斑になれるも見にくし」と云ひたるに、「わしも後日はきれいに貼代へんと思へども今日の所は殊更にかくして置くなり。物は破れたる個所の若くは狂犬ありて殺さざる者は、笞つこと四十」とあり、其疏に曰く「畜産人に觝るるものは兩角を截り、人を蹋るものは足を絆し、人を齧むものは兩耳を截る、此を標識羈絆の法と爲す」とあり。

○第百八十四段　相模守時頼の母は

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるることありけるに、煤けたる明障子のやぶればかりを、禪尼、手づから小刀して、切り廻しつつ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、『賜りて、某男に張らせ候はん、さやうのことに心得たるものに候ふ』と、申されければ、『その男、尼が細工に、よもまさり侍らじ』とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、『みなを張りかへ候はんは、はるかにやすく候ふべし。まだらに候ふも、見ぐるしや』と、重ねて申されければ、『尼も、後は、さはさはと張りかへんと思へども、けふばかりは、わざと、斯くてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して、用ゐることぞと、若き人に見ならはせて、心づけん爲なり』と、申されける、いと有りがたかりける。世を治むる道、儉約をもととす女性なれども、聖人の心に通へり。天下をたもつ

みを緒ひて用立つべきものよ若年の人に示して注意させんがためなるぞ」と云はれたるは、實にありがたき教訓なり天下を統治するの道、儉約を以て本となす、女子なれども松下禪尼の心は聖人の心に似たり。此世を保つ時頼を子にもたるるだけありて、實に尋常の人にはあらざりき。

程の人を、子にてもたれける、まことに、ただ人にはあらざりけるとぞ。

註解　相模守時頼は、北條時頼、卽ち最明寺入道なり、時氏の二男。●松下禪尼は、秋田城介景盛の女、北條時氏の室たり。●守を入れは、執權時頼を迎へ入るること。●明障子は、今の障子なり。●けいめいは、經營の訛、萬事の世話●賜りては、其仕事を此方に下されて。●さは〳〵とは、きれいに、さッぱりとの義。さわ〳〵は俗語なり。●物は破れたる云云は、貞永式目に、「小破の時は、且く修理を加ふ」とあり、是れ泰時が施政上の方針なる故に、禪尼も亦其心にて時頼を諭されんとする用意なり。●通へりは、似たりとの義。

●第百八十五段　城陸奥守泰盛は、騎馬の名人なりき。馬をひきださせたるに、足をそろへて敷居をひらりと越ゆるを見ては、「此馬はたけきき馬なり」とて、外の馬に鞍をおきなほさせられたり。又、足をあげずして、敷居に蹴あてし馬は、「此馬はよわし、過失をしでかすべし」とて、乘るを見合はされたり。馬術に達せざる人であるならば、斯程に用心するものにあらず。

○第百八十五段　城陸奥守泰盛は

城陸奥守泰盛は、さうなき馬乘なりけり。馬を引き出させけるに、足をそろへて、しきみを、ゆらりと越ゆるを見ては、『これは、いさめる馬なり』とて、鞍をおきかへさせけり。又、足をのべて、しきみに蹴あてぬれば、『これは、にぶくして、あやまちあるべし』とて、乘らざりけり。道を知らざらん人、かばかり恐れなんや。

註解　城陸奥守泰盛は、秋田城介義景の三男にして、秋田城介たる上に陸奥守を兼ねしより、城陸奥守と云ふなり。●しきみ(閾)は、しきゐ。

●第百八十六段

吉田といふ馬術家が言ひし事に、「馬はどの馬も此馬も強きものなり。人力の及ぶべからずと知るべし。すべて乗らんとする馬をよく相し、その強弱を知るべし、其次に轡や鞍などの馬具を調べ、不安心の個所ありもせば、其馬をかけさすべからず。との注意を忘れぬが馬術の達人にて、これが秘訣なり」と言はれたり

●第百八十七段

何事も其道専門の人は、よし未熟無器用なりといへども、上手の素人と共に其藝を演ずる時、必ず立ちまさるわけは常に心ゆるめず慎しみて大事にすると、一途に思ひのままにするとにより、相違の生ずるなり。藝や仕事等かは止まらず、大概の動作や注意も下手にて慎しみ深きは、其物事を成就する本にて、上手にして不検束なるは失敗の原因なり。

●第百八十八段

○第百八十六段　吉田と申す馬乗の

吉田と申す馬乗の、申し侍りしは、『馬ごとにこはきものなり。人の力、あらそふべからずと知るべし。乗るべき馬をばよく見て、つよきところ、弱きところを知るべし。次に轡鞍の具に、あやふきことや有ると見て、心にかかる事あらば、その馬を走すべからず。此用意を忘れざるを、馬乗とは申すなり。これ、秘藏のことなり』と、申しき。

註解　馬ごとにこはきものなりは、馬はどの馬も強きものぞとの意。●秘藏は、ごくい。秘訣の義。

○第百八十七段　よろづの道の人

よろづの道の人、たとひ、不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、撓みなくつつしみて、かろ〳〵しくせぬと、偏に自由なるとの、ひとしからぬなり。藝能、所作のみにあらず、大かたのふるまひ、心づかひもおろかにして慎めるは、得のもとなり。巧にしてほしきままなるは、失のもとなり。

註解　不堪は、其道に熟達せぬこと。みじゆく。●堪能の非家の人には上手にして専門家にあらざる人に。●ほしきままはほしいまま。

○第八十八段　あるもの子を法師になして

或人その子を僧にして、學問して佛教の道理をも知り、説教など爲して渡世のたよりにもせよ」と言ひしに、其子は説經師になるべく、先以て馬乘る術を思ひたり。かごや車所有せぬ身分にて、説教僧として、招かれし時、迎ひの馬に乘るに腰すはらずば心配なるべしと思ひての事なり。つぎに又、檀家にて佛事などのすみたる後、酒などだされし場合、僧が一向に藝なきは檀家にて面白かるまじと思ひ

あるもの、子を法師になして、『學問して因果の理をも知り、説經などして、世渡るたづきともせよ』といひければ、教のままに、説經師にならん爲に、まづ、馬に乘り習ひけり。輿、車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、桃尻にて落ちなんは、心うかるべしと思ひけり。つぎに、佛事の後、酒などすすむることあらんに、法師の、むげに能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり二つのわざ、やう〳〵、境に入りければ、いよいよ能くしたくおぼえて、たしなみける程に、説經

端歌を稽古なしぬ。馬術と端歌との二つ稍其道知りしが今度は進みて上手になり度はげみし内に、説經稽古するひまなく、身は既に老年となりぬ

此僧ばかりでなく、世人すべて斯の如き事あり。青年時代には萬事につけて身を立て、大なる道をも成就し、藝をもおぼえ、學問をもせんと、將來の事共を豫定しおくさまざまなる物事、忘れたるにもあられど、自分の死ぬ迄には未だ長き年月あると緩々と構へ習ふべき隙なくて、年よりにけり。

註解 因果の理は、佛教の道理。●世渡るたづきは渡世の手段。●導師は、佛事などの時の主僧。●桃尻は、馬の鞍におちつかぬ尻。●むげに能なきは、一向に藝のないのは。●檀那は施主。檀家。●すさまじくは、面白からず。興なく。●早歌は、今の端歌。●たしなみける程には、心がけて勵みたるだけいよ〳〵の義。

この法師のみにもあらず、世間の人、なべて、この事あり。若きほどは、諸事につけて、身を立て大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、うち怠りつつ、まづ、差當

て怠るひまに、先づ差掛りし目前の事ばかりに紛れ、人またぬ月日は經ち、何事をも爲し得で年老いたり。とう〳〵上手にもなり難く、豫定のやうに身も立てず、後悔すれども取りし歳は若くせられず、而も阪下る車の如く忽ちのまに老衰し去る。」

故に一生の中に、第一と思ふ物の最もよきを擇りとり、よく思案して決定し、其他はすてて只一事のみを勵むべし。一日や一時間の中にも、數多の出來事中に聊かにても得の多く有る方に着手し、其他は棄つべきなり。そして一大事の成功を急ぐべし。何事もすてずとの心有りては、一事も成りがたし。

例令ば圍碁の名人、一石たりとも無益にうたず、人より先づ小をすて大を取る。それにつけて、三石を棄て十石の方に就く事は易きも、十石をすてて十一石の方に就くは六づかし一石たりとも勝たん方に就くべきを、十石にもなればりたる目の前のことのみにまぎれて、月日を送れば、ことゞくになす事なくして、身は老いぬ。つひに、物の上手にもならず、思ひしやうに身をもたず悔ゆれども取りかへさるるよはひならねば走りて阪を下る輪の如くに、衰へ行く。

註解　行末久しくあらますは、將來の事ども豫定し置くことりと思うて。●阪を下る輪は、光陰の過くること早く老の來るを云ふ。

●世をのどかに思ひては、自分の生涯ば長きものよとゆツくされば、一生の中に、宗とあらまほしからん事の中に、何れかまさると、よく思ひくらべて、第一のことを案じ定めて、その外はおもひ棄てて、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の來たらん中に、少しも益のまさらん事をいとなみて、その外をばうち棄てて、大事をいそぐべきなり。いづ方をも棄てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。

註解　宗と云云は、第一又は肝要と思はる事の中にてその義。●案じ定めては、宗とする事を考へて決定すること。

たとへば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて、小を棄てて、大につくが如し。それにとりて、三つの石を棄てて、十の石につくこ

惜しく、多く違はぬ石とはかへ難し。彼れこれするまに、双方を失ふべき道理になる」京都に住する人、東山へ急用あり既に達するにしても、西山に行きて益多き事を思ひつかば、其門より引返して西山に行くぞよき。西山へ又その内にといふが故に、一時の怠り終身の怠りとならん、恐れざるべからず。

一事を必成すべく思はば外の事の破るるをも、人の笑ふのも構ふ事なし。萬事にかゆるとはやすじ。十を棄てて、十一につく事は難し。

一つなりとも勝らん方につくべきを、十までなりぬれば、惜しくおぼえて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも棄てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり

註解　小を棄てて大に就くは、盤面にあらはれし小さき石を取らず、大いなる石を取る義。自分の小さき石を殺し大なる石を生かす事に解してもよし。爛柯經に、「小を捨てて大を取る」とあり。

京に住む人、いそぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益まさるべき

決心なくば、一の大事は成就せず。衆中にて或人「ますほのすすきま、そほのすすき」など云ふことあり、渡邊に住む高徳の僧この事を傳へ知りたりと語りたるを、こをうち聞きし登蓮法師雨天なれば「蓑笠あらば貸し給へ」云云」と言ひしを「あんまり性急なり雨晴れてのち」と人の言ひたりしに、「愚なる事をいひ給ふな、人の命は雨の晴るるを待つものならず、吾も死し渡邊の高徳の僧も死なば、どうしことを思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。ここまで來つきぬれば、この事をば、まづ言ひてん。日をささぬ事なれば、西山のことは、歸りて又こそ思ひたためと思ふ故に、一時の懈怠、すなはち、一生の懈怠となる、これを恐るべし。

註解　日をささぬは、日をいつと限定せぬを云ふ。

一事を必ず成さんと思はゞ、他の事の破るるをもいたむべからず。人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、ある者、『ますほのすすき

まそほのすすき』などいふことあり。渡邊の聖、この事を傳へ知りたりと語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、『簑笠やある、貸し給へ。かの薄のこと習ひに、渡邊の聖のがり、尋ねまからん』と、言ひけるを、『あまりに物騒がし、雨やみてこそ』と、人のいひければ、『無下の事をも、仰せらるるものかな人の命は、雨のはれまをも待つものかは。われも死に、ひじりも失せなば、尋ね聞きてんや』とて走り出で行きつつ、習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ、ゆゆしくありがたうおぼゆれ。敏き時は

て尋ね得べき」と急ぎ行きて習はれしと云事、感心すべく又二度と有り難き事と思はる事を早速にすれば成功すと、論語に見ゆ。登蓮法師がこの薄の事を急ぎて習ひにゆきし如く、一大事の因果の理を思ふべきものぞ。

すなはち功ありとぞ、論語といふ書にも侍るなる。この薄を、いぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

註解 ますほのすすき、まそほのすすきは、共に同名にて、穂の色赤き薄を云ふ。ますもまそもは、赤色の義なり。當時は別物と誤解せるなり。●渡邊は、大阪市北區、天神橋の附近の舊名。●登蓮法師は、當時歌人として名聞えたり。●申し傳へたるこそは、和論語に見ゆるを云ふ。●ゆゆしくは、いみじく。おほいにの義。●敏き時は、論語の「敏きときは則ち功有り」との句を引用せしなり。

●第百八十九段

○第百八十九段　今日は

今日は其事せんと思ふに、異なる急用先づ出來て日暮し、待人は來で約束せぬ人意外に來、目的の物事は手違し、思ひがけぬ事は成れり。うるさく思ひし事は無事にて、容易の筈なりし事は大に六かしくなれり。毎日すぎゆく樣、前日に思ひし通りにあらず。一年も亦然り、一生涯もまた斯の如し。前日の豫定、殘らず違ふかと思へば自然に違はぬ事もあり、益す物事は定めがたし。世の萬事は、不定と

今日は、その事をなさんと思へど、あらぬいそぎまづ出で來て、まぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人は來り、賴みたるかたのことは違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。煩しかりつる事は、ことなくて、やすかるべき事は、いと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年のことも、かくの如し。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし、皆、違ひゆくかと思ふに、おのづから、違はぬこともあれば、いよ〳〵、ものは定め難し。不定と心得ぬるのみまことにて違はず。

費悟して居れば、それのみは眞實にて違はず。

●第百九十段

妻は男のもつものならず、常に獨身などと聞くは、奥床しきものなり。誰が婿となりぬ又どんな女を妻にし住むと聞けば、極めて男の心劣るべく思はる。十人並の女をよしとて連添ふかと賤しげて推せら

註解　あらぬいそぎは、意外の急用。●一年のことも、一本には一年のうちもとあり。●おのづから違はぬことは、死する一點のみは間違はぬと云ふ程の意なり。「何事も皆いつはりの世の中に死ぬるばかりぞまことなりけり」とは、法然上人の歌なり。

○第百九十段　妻といふものこそ

妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。いつも獨住にてなど聞くこそ、心にくけれ。誰がしが聟になりぬとも、又、いかなる女をとりすゑてあひ住むなど聞きつれば、無下に心おとりせらるるわざなり。異なることなき女を、よしと思ひ定

れ、美人ならば愛して本尊同様にあがめ奉るべし。例へて見れば、さうと思はれん。まして所帶女は面白からず。子生れて大事に養育するもいやなもの也。夫に死別して尼となり、年されるさま、夫の死後迄もみすぼらし。どんなに美人にても、朝夕不斷見るはいや氣さして惡くならん。女の身にとりても何れにもつかぬべし。別に居て折々通ひ逢ふが、年月たつも中の絶えざる事にもならん。一寸と來

めてこそ添ひゐたらめ、と賤しくも推し量られ、わがよき女ならば、この男こそ、らうたくして、佛と守りゐたらめ。たとへば、さばかりにこそ、と覺えぬべし。まして、家の内を行ひ治めたる女いと口惜し。子などいできて、かしづき愛したる心憂し。男なくなりて後、尼になりて、年よりたるありさま、なきあとまで、淺まし。いかなる女なりとも、明けくれ見んには、いと心づきなく、にくかりなん。女の爲も、中空にこそならめ。よそながら、時々、かよひ住まんこそ、年月經ても絶えぬながらひともならめ。あからさまに來て、

て、泊りなどするも亦面白き事ならん。

●第百九十一段

夜間には物のみえ惡しといふ人、深く遺憾なり。種々の裝飾なり色ふしも夜間が却て一

とまり居などせんは、めづらしかりぬべし。

註解　●異なることなき女は、別によくもなき女との義。●さりすゑては、妻とめとりて。●あが佛は、我が佛。自分の守本尊の義。大切にするを云ふ。●家の内云云は、世帶じみて化粧などにおろそかに、大に面白からずとの意。●かしづきは養育すること。●にくかりなんは、いや氣がさして惡くなるべしとの義。●中空は、何れにもつかぬこと。又、疎略の義。●あからさまに來ては、あからさまは、倏忽の義、かりそめに來て。ちよツと來て。

○第百九十一段　夜に入りて

夜に入りて、物のはえなしといふ人、いと口惜し。萬のもののきらかざり、色ふしも、夜のみこそ、